社會からも、合言葉のやうに言はれてをります。私はそれを文字通りに一般の教育者に當てはめようとするほどの稚氣はありませんが、併し理想的には教職が聖い天職であることを認めなければなりません。それに、何と言つても他の職業に比べますと、教育者には貴い使命があり清い慰安があります。それ故に、たとひ本來の志望で教育者になつたものでなくても、一たび教壇に立つやうになつた以上は、その使命を完うするやうに努力しなければなりますまい。殊にまた、生徒を教へることが主であつて、同僚との交際や世間に對する心づかひは、第二位に置いてよいことなのですから。

生徒を教へることが厭でない限り、他の苦痛や不滿は、どうにかして忍ばなければなりません。どんな職業に就いても、仕事それ自身に對する考へ方と、周圍の情實にからまる心遣ひとは、一致しないのが普通であります。ですから教職にあるものは、自己の感化を少しでも生徒の上に及ぼすことが出來れば、それでもう使命の

過半は完うされてゐるとして、自ら慰めなければならないのです。斯うして、愛らしい教へ子の心に自己の影を見出した時の喜びは、どんなに大きいでせうか。それこそ他の職業に就いてゐるものゝ想像にも及ばない所があるに相違ありません。

二四　職業とその能力

ある朝、私は爲替を組まうと思つて或る郵便局に參りました。その郵便局には、二人の男子事務員と三人の女子事務員とが居ました。私が行つた時には、幸に閑散らしく窓口がすいてゐました。男の事務員の受持になつてゐる窓口に、電報を依頼してゐる小僧と、小包を頼まうとしてゐるものが二人待つてゐるだけで、爲替口には誰もゐませんでした。私は早速爲替用紙を貰うて、金額や受取人の宿所氏名など

を記して、窓口に差出しました。

爲替係の女事務員は、私の差出した用紙とお金とを横目で見たきり、ツイと席を立ちあがつて、後の方の柱にかけてある鏡の前に行きました。私は初めの間、おとなしく待つてゐました。そのうちに、窓口へはどこかの小僧が二三人と、赤坊を負ぶつた主婦らしい人とが這入つて來て、『お願ひします』と言ひました。けれども鏡の前の女事務員は、それ等の人々に見向きもせず、頭髪の格恰を直したり、身體にシナをつくつて見たりしてゐました。

他の二人の女事務員は、少し離れた所の椅子に腰かけたまゝ、窓の外へ來てゐる人々には一切お構ひなく、二人の間にのみ通用するやうな言葉で、何か面白さうに話し合つてゐました。

三分、五分と、時は過ぎて行きます。郵便事務を帶びて窓口へ來る人は、だんだん多くなります。それでも女事務員たちは平氣な態度で、鏡に見入り、話に花を咲

かせるばかりで、仕事に手を着けようとはしません。私は待ち疲れるとゝもに、一種の憤りを感じたので、

『早くして下さい、先刻から待つてるんぢやありませんか。』

と、たまりかねて鋭く言ひました。すると、漸く手のすいた男の事務員が、すぐ傍の椅子から移つて來て、私の爲替に手を着けてくれました。それに續いて、三人の女事務員はしぶ〳〵定められた位置に着いて、その事務を執りはじめました。

或る郵便局で見たた丶一時の例によつて、多くの職業婦人の態度をかれこれ言ふのは、あまりに早計でもあり、獨斷的であるかも知れません。併し私は、自由職業に就いてゐる婦人たちがこんな態度で事務を執つてゐるやうでは、一般に婦人がその人格を發揮して、社會上にも經濟上にも獨立自主の地位を占めることは、まだまだ遠い將來であることを情なく感ぜずには居られませんでした。すでに職業に就いた以上は、なぜその業に全力を注いで、あらゆる責任を負ふ覺悟を持たないのでせ

うか。近時の社會狀態の變化、經濟事情の壓迫、精神上の覺醒に促されて、婦人も職業に就くことは就いたけれども、その執務ぶりや能率が到底男子に及ばず、殊に職業上から起る幾多の責任を自ら負ふことが出來ないといふやうでは、その實力が認められないばかりか、却つて世の輕侮を買ふことになつて、その結果、折角問題に上りつゝある婦人の職業に對する理解に、わるい影響を及ぼすことになりはしないでせうか。●

想ふに、婦人の職業に對する觀念には、多年の習慣上、まだ片手間の仕事として「これを輕く視る弊があります。一家の經濟上、幾分でも家計の補助にしようとか、嫁入支度の費用を得ようとかいふ考へから職業に就いてゐる婦人は、精神的に職業が如何に貴重なものであるかを自覺してゐるのではなく、外的事情によつて餘儀なく職業に就いてゐるのですから、そこに眞劍な態度がないのは無理もない、と言はゝ言はれます。從つてその給料も、男子以下の少額で滿足してゐなければなりませ

ん、即ち、自ら一家の生計を支持して行くのではなく、その父なり良人なりが立てゝ居る生計を幾分でも補助すればよいといふのですから、生活必要限度（Minimum of existence）以下の給料でも、さしたる不平を言はず、無爲に遊んでゐるよりはよいとして、おとなしく服從して居るのであります。

併し、かうして婦人が職業を片手間仕事として視ること、並びにその職業から補助的收入を得ようとする觀念が、どれだけ婦人の職業を不純なものにしてゐるか解りません。すでに片手間仕事であれば、それに對して全力を傾注する氣になれないのは當然のことです。さういふ無責任な執務者に對しては、雇主が十分な俸給を拂はないのも、勿論怪しむに足りません。斯くして婦人は、一般に職業上では男子に及ばないもの、給料も少なくて濟むもの、と評價されるやうになつたのであります。

斯ういふ習慣上の先入觀念に支配されてゐるのに、一方ではまた經濟上の獨立を自覺して職業に就く婦人が、日を追うて多くなりつゝあります。これ等の婦人は、

家庭の内でも社會に出ても、婦人が奴隷のやうに男子に從屬して、あらゆる束縛を強ひられるのは、要するに經濟上の獨立を保つべき資力がないからである、精神的に自由解放を求めるためには、どうしても經濟的自立の能力をもたなければならない、といふことを自覺して居ります。この見地から、自發的に、進んで職業に就いてゐるにも拘はらず、その待遇はいはゆる片手間にしてゐる不徹底な就職者と同樣で、極めて低廉な俸給しか與へられないといふのでは、實に慨嘆すべきことだらうと思ひます。この點について、婦人はその職業に對する見方を、在來のそれとは根本的に改めて行かなければなりません。そして、新らしい見地から職業に就くことと、婦人の家庭生活とが如何に交錯するか、男子とともに將來の文化を進める上に、婦人の職業がどんな影響を及ぼすかといふことが、大きな問題となつて、今現に私たちの前にその解決を迫りつゝあるのであります。

婦人の職業問題について、嘗て森戸辰男氏は社會政策學會で、わが國に於ける

女子の職業幷びにその勞働の實際狀態を委しく報告されたことがあります。その中で、

『現代に於ける職業女子の地位は、少數の自由職業者の外、極めて劣惡である。彼等は一方からは家庭生活に伴ふ封建的專制に、他方からは社會生活に伴ふ資本的專制に脅かされつゝある。この二重の負擔によつて、前後より壓倒されてゐる彼等の生活狀態を特徴づくるものは、人的奴隷と低き地位と、廉き賃銀と、長き勞働時間と、不完全なる住居と、不良なる榮養とである。』

と警告を與へ、更に語を激まして、

『職業は女子の解放者であると言はれる。女子が性的寄生の狀態よりのがれる道は、經濟的獨立であり、經濟的獨立への公道は、即ち職業である。然るにも拘はらず多くの女子は、その職業生活に於て、新たなる奴隷の境遇に立ちつゝある。職業は彼等にとつて解放者ではなくて、却つて桎梏であり鐵鎖である。』（「日本に於ける女子職業

と述べて居られます。この桎梏を脱し、この鐵鎖から解放されるには、無論現代の資本主義制度を改めて、産業狀態を公平ならしめなければならないでせう。併し、さういふ改革が何によつて促進されるかといふことを究極的に考へて見ますと、どうしても働く人自身の心が、そこに向つて動かなければならないのであります。即ち婦人自らが（男子も同樣でありますが、）經濟的にも社會的にも、その生活狀態を改め、その地位を向上せしめることに意を致さなければなりません。いつまでも片手間仕事に甘んじて、補助的收入を得ることに小さな慰安を得て居るやうでは、半奴隷的狀態から解放されることは、蓋し遠い將來の美しい空想に過ぎなからうと思ひます。

束縛と侮蔑とから脱して、その境遇を自由ならしめ、その生活に幸福あらしめようとするには、先づ自分自身のことに就いて、すべての責任（過去のことにも將來

のことにも、將たまた積極的に（消極的にも）を感じなければなりません。ながい間の抑壓から解放された婦人は、今や各自にその人格を認められて居るのであります。然らばその人格者としての責任も、當然各自が負つて行かなければなりますまい。蓋し人格的存在とは、自意識あり自覺あることで、而も責任の主體であることを意味するからであります。責任を回避してその人格を認められようといふのは、買物をしてその代價を拂はざるもの、否、代價をも持たず用途をも知らずして、むやみに店頭の品物をほしがるやうなものであります。

人格が責任の主體である以上、苟くも自ら顧みることの出來る人間は、すべての言行にその責任を持たなければなりません。婦人だからとて、決して責任を回避して許さるべき理由はないのであります。然るに婦人は、動もすれば他人の袖の蔭にかくれて、その責任を免れようとする傾きがあります。日本のやうな家族制度の發達した國では、これまで婦人は家庭の内にのみ閉ぢこめられて、家庭での出來事に

ついては、たとひ婦人が自ら意識して行つた場合にも、その責任は父または良人、（即ち戸主）が引き受けることになつてゐました。その習慣上、婦人は社會に出て自ら或る職業に就くやうになつても、やはり責任を感ずる念が薄いのではないか、と思はれます。社會もまた婦人に責任感が乏しいのを、大目に見過す傾きがあります。

嘗て或る教育雜誌に、女教員の告白として、教育界に於ける女教員の不平やら要求やらが掲載されたのを讀んだことがあります。執筆の女教員十數名、何れも隨分突つ込んだところまで書いて、因襲的である情實的である教育界に、かなり辛辣な批評が加へてありました。併しそれを書いた十數名が、揃ひも揃つて匿名を用ひてゐるのを見て、私はそこに責任回避、自己防衛の卑怯な手段が弄されてあることを慊りなく思ひました。それ等の女教員は、自分が正しいと信じて批評したり要求したりすることに、なぜ明らかに本名を署さなかつたのでせうか。本名を記すに憚る

やうなことを、なぜ堂々たる雜誌の上で發表したのでせうか。苟くも自信をもつて天下に訴へる以上は、誰に見られても耻かしくない筈なのですから、責任を明らかにするために、その本名を署すべきだらうと思ひます。（これは併し、雜誌社の方で故意に變名を用ひるやうに望んだのかも知れませんけれど。）

貞淑と因循とを履きちがへたり、温順の德を養ふために奴隷的屈從を強ひられたりしてゐた在來の慣習では、婦人が何事も他人の袖の蔭にかくれようとするのは、無理もないことであります。言ひたいことも正面からは言ひ得ないために、蔭で愚痴をこぼしたり、中傷したりするのが、これまで婦人の本性であると見做されてゐました。けれども、婦人が男子と同樣に人格ある人間である以上、本質的にそんな惡い性情をもつてゐる筈はありません。婦人の惡德は、すべて在來の間違つた慣習と、不合理な社會制度の下に仕組まれた教育とによつて養成されたものである、と斷言しても差支なからうと思ひます。從つて、その間違つた習慣から脱却して、不

合理な女子教育を正しく改めたら、今後幾代かの間には、現に私たちが見てゐるやうな婦人の弱點や短所は、きつとなくなるだらうと信じます。

婦人の知能が男子のそれに劣つてゐるといふ意見も、要するに在來のながい慣習に囚はれた偏見であります、もし婦人を男子と同樣に、十分その知能を發揮せしめるやうに早くから教育したら、決して男子に劣るものではないといふことが、幾多の實驗や統計によつて確められて居ります。從來、知力の上で一般に婦人が男子に劣つてゐるやうに見えたのは事實です。けれども、それは絶對的のことではなくて、要するに教育上にも社會上にも機會の均等が與へられなかつたからであるといふことが、多くの學者の定說となりました。婦人は男子に比べて體力が弱いとか、大腦の重量が少ないとかいふことを理由として、その知力までも男子に劣つてゐると推論するのは、事實を無視した誤謬であります。何故かと申しますと、古來偉人の中には、體力の弱かつた人や大腦の少なかつたものがいくらもありますし、またその

反對に、低能者や白痴の中にも、常人以上に重い大腦をもつてゐたものがあるからであります。

それ故に婦人は、どの方面にも機會の均等さへ與へらるれば、そしてまた天賦の才能を十分に發揮するやうに練磨すれば、決して男子に劣る譯はないのであります。勿論、人々の個性を無視することは出來ませんから、男子にも愚鈍なものがあると同樣に、婦人にも知能の低劣なものがあるのは、いふまでもありません。こゝには一般的に婦人と男子とを比べてゐるのであります。

これまでの婦人は、ながい間の習慣と偏見とに囚はれて、その能力を自分から低劣なものときめてゐたのでありますが、一たび心の眼をあけて自ら顧みますと、それは極めて不合理なことであり、不幸なことであることが解ります。そしてこの自覺自信に立脚することが、あらゆる婦人問題の第一歩であるとゝもに、またその到達點であると言はねばなりません。即ち、斯ういふ自信によつて、婦人は教育問題

にも政治問題にも經濟問題にも勞働問題にも、男子と均等の機會を要求することが出來ます。そして、一個の人格者として男女平等であることには、もはや議論の餘地がないのですから、婦人の要求も當然容れられなければなりません。斯くして、男子と共通であるべき社會制度上ならびに經濟上の諸問題は、もはや特に「婦人」何々の問題として特殊扱ひにされる必要はなくなります。そして最後に殘るところは、たゞ男女兩性の問題があるばかりであります。

世の中には、婦人問題と兩性問題とを混同してゐるものもあるやうですが、これは明らかに區別しておかなければなりません。婦人問題は婦人の自覺と社會狀態の變化とによつて起つたものでありますから、婦人思想の啓發とゝもに、おのづから解決されなければなりますまい。けれども、男子と女子とが異なつた性である限り、その間に起る兩性問題は、永遠にやむ時はなからうと思ひます。

婦人問題として取扱はれつゝある當今の多くの問題が、概して婦人を男子よりも

一段下位にあるもの、低劣であるものといふやうな見地で論議されるのを、私は甚だ不合理だと思ひます。それに對して、なぜ婦人自身がよそ事のやうな顏をして居るのだらうかと、慨いても見ます。併し多くの婦人が、これ等の問題をよそ事のやうに傍觀してゐる限り、合理的に正しく解決されないのも已むを得ません。それは婦人自身が、まだほんとうに自己の能力とその權利とを自覺しないのですから。

こゝで、私はまた繰返して婦人がその能力と責任とを自覺することを促さずには居られません。そして、もしその能力に於て劣つてゐる所があると氣がつけば、進んで自らそれを啓發するやうに努めなければなりません。今まだ進展の途上にある多くの問題は、知識の啓發と思想を豐富にすることゝによつて、その局面が改めてゆくことが出來るからであります。

二五　人格本位の結婚

最近の數年間に社會狀態や經濟事情が著しく變つて、婦人の行くべき道がさまゝの方面に開かれるやうになつたゝめ、結婚に對する考へ方も、これまでとはよほど違つて來たやうであります。

從來、婦人の行くべき道といへば、極めて少數の例外を除くの他、殆んど結婚にのみ限られてゐました。學問も藝術も職業も政治も、婦人に對しては皆かたくその門戸を閉ざして、たとひその道に進み得る力のあるものでも、そこに入ることを拒まれてゐました。それ故に婦人とうまれた以上は、結婚するより他に道がない、そしてまた一たび結婚すると、終生離れることの出來ないものとして、その運命を定められてゐたのであります。即ち、結婚は婦人に取つて、どの點から見ても決定的のものであつて、これを避けることも出來なければ、破ることも許されなかつたの

であります。

けれども、結婚は婦人のみによつて行はれるものではありませんから、もし結婚が人生の重大事件であるならば、それは單に婦人ばかりに限られたことではなく、男子に取つても同樣であらねばなりません。結婚に關する倫理的意義や夫婦間の道德は、男子にも婦人にも同樣に重んぜられなければならないのに、これまで婦人にのみ多くの責任が負はされたのは、要するに男子は社會に出ていくらでも生きる道があるに反して、婦人は結婚以外には精神的にも經濟的にも生きることが出來なかつたからであります。併し、そんな不合理な慣習が、いつまでも保たれて行く譯はありません。今や婦人の前には、殆んど男子と同樣に、幾多の道に進むべき門戸が開放されました。結婚を唯一の望みとしないものも、何等かの方法によつてその立場をつくることが出來ますし、また自己の意志に反する結婚を強ひられるにも及ばなくなりました。從つて婦人は、結婚に對するすべてのことを、自分自身の意志に

よつて判斷する自由を持つやうになつたのであります。

すでに是が非でも結婚しなければならないと決定的に强制されるのでなく、自分の意志によつてどうでも定めることが出來るとなれば、その選擇、商量、ならびにその決定によつて生ずる一切のことに、自ら責任を負はなければなりません。即ち、何のために結婚するか、どういふ男子と結婚すべきか、またその結婚に障害が起つたら、どんな方法を取るべきであらうか、結婚後はどういふ生活を理想として進むべきだらうか。――それ等の點について、十分によく考へて見ることが肝要であります。

種族の保存及び繁殖をはかることが、私たち人類の本能である以上、それを意識するとしないとに拘はらず、結婚はその本能にもとづいて行はれるものと言はなければなりません。さういふ種族的立場からばかりでなく、個人的に考へて見ても、人格を充實させ發展させるためには、どうしても結婚しなければならないと思ひま

す。男子も婦人も、或る特別の事情に妨げられない限り、結婚によつてはじめてその人格も充實するし、生活にも意義があるやうになるのであります。即ち、男子はよき婦人を、婦人はよき男子を選んで精神的に結合することによつて、はじめてその全人格が現はれて來るのであります。夫婦はお互ひに善き半分であるといふ言葉には、この解釋に於て深い意義があると、私は信じて居ります。

そこで、善き半分を選ぶには、どういふ條件を必要とすべきでせうか。第一に擧げられるのは、相互の間に純潔な愛がなければならない、といふことであります。愛のない結婚が非人道的であることは、今さら言ふまでもないのでありますが、動もすれば世間では今なほ愛のない結婚が行はれます。相互の間に愛がないのに、經濟上の事情とか、親族の都合とかによつて、結婚を餘儀なくされるのは、要するに當人の意志が尊重されないからであります。當人の意志が踏みつけられるのは、多くの場合、理解のないことゝ當人に自立の力のないことゝに因るやうであります。

詳しく申しますと、當人たちがその結婚を望んでゐるかどうか、また相互の間に愛情があるか無いかといふことを、周圍の人々が十分によく理解してゐない場合に、第三者の推察によつて、好い加減な緣組みが結ばれるのであります。從つて、さういふ不正當な結婚を避けるには、先づ當人が僞りのない意向を發表して、周圍の人人にはつきりとその意のある所を知らしめなければなりません。

併し、當人の意向をいくら申し述べても、第三者によつて一向理解されず、むやみに踏みつけられてしまふことがあります。結婚問題について若い婦人が人知れず思ひ惱むのは、主としてこの場合の態度だらうと察します。愛情もなければ趣味の一致もない男子のところへ、無理やりに嫁がせられる、そして一たび嫁いだ以上は、どんな精神的苦痛を續けても、終生そこから離れることも出來なければ、誰にその苦痛を訴へる術もない、まるで生きながら葬られると同樣の境遇に落ちてゆくのであります。人生これほど不幸なことがあるでせうか。而も、かういふ結婚を强

制する周圍の人々は、それは當人の運命だから、おとなしくあきらめなければならないと說き聞かせます。勿論、さうなつたのは運命であると言はゞ言はれませう、けれどもさうならない前に、當人が飽くまでもその不合意な結婚を拒絕したら、運命はどう展開したか解らないのであります。然るに、それを拒絕し得ないで、いやゝながらも第三者の强制に服從したといふのは、そこに當人にも大きな責任があると云はねばなりません。

なぜ拒絕し得なかつたか——それは當人の意志が弱かつたからです。力が足りなかつたからです。その結婚に從はなければ、他に行くべき道を持つてゐなかつたからです。更に碎いて申しますと、その結婚を厭がつて父母や親類の感情を害して、全然父母から突きはなされてしまへば、自分一人では生きてゆくことが出來ないといふ不安があつたからであります。もし自分自身で、經濟的にも精神的にも立派に生活してゆくだけの力があれば、生涯の幸福を犧牲にするやうな結婚に承諾を與へ

る筈はないのであります。

この點から考へて私は、若い婦人が愛情を第一におく正しい結婚をする準備として、まさかの時には獨立自營し得るだけの力を養つておくことが肝要があると思ひます。思想上で愛だの理解だのといふことを述べ立てましても、實際生活の上では誰かの庇護を受けなければ立つて行かれないといふやうでは、どうしても最後には自己の意志を枉げて、庇護者に服從しなければならなくなります。即ち、自分の意志が尊重されることを望むならば、それ相應の實力を持たなければならないのであります。

もし結婚が父母や媒介者の意志によつて行はれたり、何等かの手段として行はれたりするのを、やむを得ないことゝして許すならば、當人は無知無能であつても好い譯です。むしろ當人は無知無能である方が望ましいのです。それはどんな不合理なことにでも盲從することが出來るからであります。けれども、すでに當人が目さ

めて、その人格を認められようと望む以上、そしてまた結婚によつて人格を充實させることに人生の意義を見出さうとする以上、どうしても當人の意志が第一に重んぜられなければなりません。

斯うして、當人の意向を第一に見るやうになれば、愛のない結婚の行はれることは、恐らくはなからうと思ひます。けれども茲にいふ愛は、一時の亢奮した戀愛ばかりを意味するのではありません。一時の戀愛が終生の愛であるかどうか、豫期しがたいこともありますし、また婦人の方に美しい愛があつても、男子が不純な考へを持つてゐる例もあります。それ故、相互の愛が果して純眞なものであり永遠なものであるのを知るには、ながい間の交際その他の方法によつて、相互の心情や境遇を、十分によく理解するやうに努めなければなりません。この點に於て日本の結婚は、男女ともに餘りに急ぎ過ぎる弊がありはしないでせうか。

その弊を除くために、若い男女がもつと美しく交際する道を開かなければなら

い、と私は思つて居ります。これまで日本の若い男女は、親戚とか或る特別に深い關係のあるものゝ他は、殆んど自由に交際することを許されてゐませんでした。從つて、どうすれば若い男女が清く美しく交際し得られるか、その方法も講究されてはゐなかつたやうです。たま〳〵交際すれば、自由の意義を取り違へたり、無作法な行動を取つたりして、識者の顰蹙を招くやうな結果になつた例も少なくありません。併し、婦人も男子も自己の品位を重んじて、すべてのことに責任を自覺するやうになれば、おのづから交際の眞意も解ることですから、今後はます〳〵その機會を多くして、結婚に對する相互の理解を助けるやうにしたいと思ひます。

相互の間に愛と理解とがあれば、當人の意志のみによつて結婚を取りきめても好いかといふに、必ずしもさうと許す譯には行きません。結婚前の年頃にある若い人々は、何と言つてもまだ經驗も乏しいし、世の中の事情に對する洞察も足りないのですから、やはり父母や先輩の意見を聞いて參考にする必要があります。殊に自分

の意向と父母のそれとが齟齬して、問題が紛糾して來た場合に、たゞ自分一個の都合のみを主張するのは、決して賢い方法ではありません。そんな場合には、靜かに周圍の事情をよく考察する必要があります。それに、周圍の事情とか家庭の都合とかいひましても、自分といふものを廣く大きく考へて見れば、その周圍の事情もやはり「自己」の一部分であり、自己の生活の背景であることが解ります。それ故に、父母の意見と自分の張りつめた心もちとが衝突した場合などには、更に利害關係や恩愛關係を離れた先輩について、公平な批判を乞ひ、適當な助言を求めるのがよいのであります。

斯うして、父母や先輩の意見も結婚を定めるのに大きな力とはなりますが、とにかく當人の意志が最も重きに置かれなければならない、と私は思ふのであります。それからまた第二の條件（或る意味では第一の條件）として、身體が強健であるかどうかを考へなければなりません。身體の虛弱なものや、難治の病氣をもつてゐる

ものと結婚すれば、當人の不幸はいふまでもないこと、次に產れるべき子供の弱さをも豫想しなければなりません。弱い子供が產れますと、親たちの個人的立場から見ましても、非常な心配であり負擔でありますが、更にまた國家社會に取つても、不健全な國民になるのでありますから、身體の弱い男女の結婚は、ひいて國家の盛衰に關する大きな問題となります。これは結婚前の若い人々が、やゝもすれば考慮の中に入れないことでありますが、併し結婚すればやがて子供の產れることを期待しなければならないのですから、特に重大な要件として考へて頂きたいのであります。

次に、結婚して新らしく家庭を構成すれば、それ相當の體面を保つて生活し得るだけの經濟的條件を必要とします。いかに熱烈な愛情があつても、一家を經營するに足るだけの經濟的資力をもつてゐないものと結婚する譯には行きません。財產や地位を目あてに結婚するのが間違つてゐると同樣に、それ等のことを全然

眼中に置かず、どうして生活してゆくか、その資力も準備もないものと結婚するのも、人生に對する考慮の足りないものと言はねばなりません。當人に經濟上の資力がなくても、父の財產や親戚のそれを賴みにして、一人前の顏をして居るものが、世の中には少なくないやうです。併し私の考へでは、男子と婦人とが精神的に結合して、そこに一つの新らしい家庭が出來るのですから、經濟上にもその一家は獨立したものでなければなりますまい。父のものを子が受け繼いだといふのでは、眞の意味に於ける夫婦の家庭ではない、と私は考へてをります。それ故に、結婚する以上はその新らしい家庭を、すべての點に於て自由に經營してゆくだけの力を持つてゐなければなりません。新夫婦と舅姑との別居生活といふことも、今後は追々に廣く實現されてゆくと思ひますが、それも新らしく家庭をつくるものゝ經濟的資力に待たなければならないのですから、結婚條件の一つとして、これは大いに考慮すべきことであると信じます。

こゝで述べておきたいのは、いはゆる嫁入支度としての衣類や調度のことであります。結婚といへば婦人にはその支度が附きものになつてをります。親たちの中には、娘を嫁入らせたくはあるが、その支度が出來ないから、もう少しその時期を延ばしたいといふやうな考へを抱いてゐるものさへあります。これでは、娘を嫁入らせるのか着物を取り揃へてやるのか解らないことになります。

勿論、新らしく家庭を構成するのですから、婦人も男子も一通りの着物は必要です。またこれまでに拵へて持つてゐるものは、皆その當人に附けてやるのがよろしい。けれどもそれ以上、特別に多くの着物を拵へたり、立派な箪笥を買ひ調へたりする必要はありますまい。殊に、その支度が出來なければ結婚が不可能であるかのやうに考へるのは、ふるい慣習に支配された陋見であると言はねばなりません。結婚は人と人との人格的結合であつて、金錢や地位や名聞がその要件でないことは、前にもたびたび述べました。況して、着物や箪笥長持の多寡によつてその價値の問

はれる筈はないのであります。

結婚の支度が重大視されてゐるために、若い婦人がその親たちから、どれだけ荷厄介にされてゐるか解りません。中流以下の家庭では、女の子が多いと貧乏するまで言はれて居ります。これは明らかに結婚の際の支度に多くの費用がかゝることを意味してゐるのであります。こんなことのために、婦人が娘時代にその親たちからまでも侮蔑されて、男の子と同等の教育さへも施されないといふのは、慨かはしいことではありませんか。結婚の際に立派な支度をしてもらふために、親兄弟に輕からぬ負擔をかけると思へば、わかりの好い娘ならば、それだけ肩身の狹い思ひをして、自ら卑屈な心を養ふやうにならないとも限りません。それほど身を卑うして、着物や調度の類を持ち運んで行かなければ、人の妻となることが出來ないといふやうでは、そこでも婦人自身が自らその地位や能力を賤しめて居ることになります。そんな不合理な考へは、なるべく早くにこれを改めて、不必要な慣習や形式を

取り除くやうに努めたいと思ひます。

要するに、結婚が人格本位のものであるといふことを忘れなければ、すべての條件や方法は、そこから解き出されて來るのであります、從つて、結婚に對する若い人々の考へを定めてゆくに當つても、各自の人格を重んじて、その充實發展をはかるやうに努めるのが、第一の心がけであります。

二六　結婚と經濟上の獨立

婦人が經濟上の獨立をして、衣食のために結婚する必要がなくなれば、各自の希望通りに立派な男子を配偶に選ぶことが出來るから、從つてその子孫も優良なものになる、といふ意味のことを、進化論の學者ウォーレースが人種改善の立場から述

べてをります。結婚はたゞ生活の安定を得ることのみを目的として行はれるものではありませんから、婦人の經濟上の獨立が、直ちに結婚の改善を促す原因であると斷定することは出來ないでせうけれど、この意見にはたしかに一面の眞理が含まれてゐると思ひます。

若い婦人が周圍の事情に迫られて、心にもない結婚をする、そのため尊い生涯を生き甲斐もなく送るやうになる事例は、現今のわが國にはあり餘るほど澤山あります。そして、さういふ不本意な結婚を強ひられるのは、たとひ事情がどんなに複雜して居ようとも、その事情を押し切つて出るだけの力が、當人にないからであります。

『私は意志が弱いんですもの、犧牲になるより他仕方がありません。』斯う言つてあきらめるのは、結局さうするより他に、生きて行く途がないからです。精神的に生きるとか、生きながら葬られるとかいふ意味ばかりではなく、物質的にも庇護者の

手から突き放されてしまふと、自分ひとりで生きて行くことが出來ないからであります。いはゆる背に腹はかへられませんから、愛のない不合理な結婚であると知りつゝ、遂には身を屈して行かなければならないことになります。斯くして、結婚の正しい意義は認められずに、婦人の家庭生活に於ける幾多の悲劇が起つて來るのであります。このことについては、前章『人格本位の結婚』の中にも、くどいと思はれるほど力説しておきました。

いふまでもなく、夫婦關係は良人と妻との靈魂が一點の不純を混へない愛によつて結合されたものであらねばなりません。良人の心のすべてを妻が理解するとゝもに、良人もまた妻の心のすべてを理解した相思相愛が、夫婦關係を成り立たせる第一條件であります。メエテルリンクの『アグラヴェーヌとセリセット』の中に、(全篇の趣意からいふと、こゝにこれを引くのは不適當かも知れませんが)わかい貴公子メレアンドルがアグラヴェーヌに向つて、

『……私は自分を知る前に、あなたといふものを知らなければならないやうになつて來ました。私は何事もあなたから感化を受けるやうに思はれ出しました。私は自分の心よりも、あなたの心の方を一層よく知るやうになりました。あなたは私自身のすべてのものよりも、私に近いものになりました。……』

といふと、アグラヴェーヌはこれに對して、

『私にとつても、やつぱり同じことです。……あなたが私の中に花を開くやうに、私はあなたの中に花を開きます。……』

と答へる所があります。これほどの理解と愛情とがあつてこそ、はじめて全靈的に結合し得られるのであります。從つて結婚は、相愛する一人の男子と一人の女子との外、他の何ものを以ても替へられないものであると同時に、第三者が當事者の意志を枉げさせることも出來ない筈であります。それにも拘はらず、實際に於ては當人たちよりも、むしろ周圍の人々によつて結婚のことが取り定められたり、當人た

ちの自由意志が妨げられたりするのは、どういふ譯でせうか。

第一には、これまで婦人の人格が尊重されなかつたから。第二には、世間に對する體面を氣にし過ぎたから。第三には、婦人に經濟的自營の力がなかつたから。——この外にもまだ特殊の事情を數へることが出來るかも知れませんが、大體この三つを大きな原因として答へてよからうと思ひます。

ながい間の偏頗な教養と因襲とによつて、婦人の人格が無視されてゐたことは、今さら事々しく記し立てるにも及びますまい。近代婦人問題の第一出發點は、實にこの人格の尊重、個性の解放であつたと言つて差支ありません。殊にわが國では、家族制度の偏見に囚はれて、婦人の人格といふものは、殆んど認められてゐませんでした。從つて結婚の際にも、當人の意志よりも家と家との關係を、より重く視る傾きがありました。即ち、結婚は夫婦の愛の結合ではなくて、家を繼ぐための方便に過ぎなかつたのであります。

併し、人間としては男女對等であるといふことが認められるやうになつた以上は、もはや婦人を家や良人の道具に使ふことは出來ません。婦人は婦人としての自由意志によつて、その配偶を求め、新らしい家庭を構成して行かなければならないことを自覺しました。從つて、思想の上でも實際生活の上でも、それだけのことを自ら取り定め得る力を養ふことが、第一の急務であります。單に一時の愛情にほだされて、その愛が果して純潔なものであるかどうか、また良人とすべき男子の性格や技倆が信頼するに足るかどうかをも究めずに、輕々しく結婚に急がうとするのは、自分で自分の人格を蔑視するものであると言はねばなりません。

元來、人格には必ず責任が伴なひます。自ら顧みて自己のすべてを知るとゝもに、自己の行動に關する一切の責任を負ひ得るものでなければ、その人格を認めさせることは出來ないのであります。自分勝手に戀愛事件を起しておいて、それから起つて來る經過に對して、自ら處置をつけることが出來ないやうでは、自分の意志

を主張する資格はありません。一たび自分の考へによつて配偶者を選び定めた以上は、どこまでもその責任を自覺して、一切の事件を自ら解決して行つてこそ、はじめて意志の自由も認められ、その人格も尊重されるのであります。

單に結婚の問題ばかりでなく、一體に婦人は何事に對しても責任の觀念が弱いやうです。そのため、婦人がどれだけ男子から侮蔑され、且つ劣等視されてゐるか解りません。能力に於て男子に劣らない婦人も、責任を廻避したり、これを他に轉嫁したりするために、重要な仕事にたづさはるのを危險視されてゐる例が、實際社會には澤山あります。この點は、若い婦人が特に注意しなければならないことだらうと思ひます。

それから、世間に對する體面を氣にし過ぎることも、婦人が自分といふものをはつきりと認めないからです。家名を傷つけないためとか、父母の名譽をけがさないためとか、自分の虚榮心を滿足させるためとか、さういふ不純な事情の下に行はれ

る結婚は、もとより正しいものと見ることは出來ません。而も、そんな情實によつて結婚を強ひられるのは、當人の人格が認められないからであります。勿論、中には家名を完うするために、或は父母を滿足せしめるために、自分から諦めをつけて結婚するものもあります。美しい言葉を使ひますと、周圍の事情のために一身を犧牲に供するのであります。

併しその犧牲の精神が、果してながい生涯を通じて持續されるかどうか。一時の犧牲が、將來になほ一層大きな禍を釀すことになりはしないか。これこそ責任を自覺して、深く考へて見なければならないことであります。

最後に、經濟上で獨立自營の力のないものは、どうしても誰かの庇護によつて生きて行かなければなりませんから、やゝもすれば庇護者に對して屈從的態度を取るやうになります。日本の家庭で男子が專制君主的態度を取つて、その妻子に對して生活上の恩惠を施してゐるかのやうに振舞ふのは、要するに婦人に獨立の能力が

ないからであります。思想の上では男女對等、夫唱婦和を口にしてゐましても、實際生活の上では、どうしても生産的能力のない妻は、良人から家婢同樣の取扱ひを受ける場合がないとは限りません。愛情のある無しに拘はらず、良人の庇護を受けなければその日の食を得ることすらも出來ないといふやうでは、妻は良人に對して常に愛憐を乞ふ態度を取らなければなりませんせん。

殊に、これから結婚しようといふ若い婦人が、父母の意見と自分の望むところとが相違した場合に、あくまでも自己の意志を主張し得ないのは、父母の家を離れての生活に不安を抱くからだらうと思はれます。金のため、地位のため、權勢のための結婚を餘儀なくされるのは、一口に婦人の意志が弱いからとか、虚榮にあこがれるからとか言つて、冷罵し去るべきではありません。そこには、同情すべき苦痛を忍んでゐるものも少なくはないのでせう。それは即ち、周圍の事情を押し切つて、自己の愛情を完うし得るための經濟的自營の力を持たないからであります。

この點から見ましても、若い婦人は、將來或る職業に從事すると否とを問はず、とにかく自己一身の生活に困らないだけの職業的技能を養つておくことを心がけるのが肝要であります。それは自己の生活を保證するばかりでなく、その良人に捧げるべき愛情をも純潔に保つことが出來るからであります。斯くして、夫婦共同の力によつて新らしく家庭をつくることが、婦人の本性から見た使命の第一歩であらねばなりません。

×

婦人の本性による使命が良き妻となりよき母となることであるのは、少數の例外を除いて、ほゞ一般に承認されることであります。併し、それだからと言つて、直ちに在來の所謂良妻賢母主義でなければならない、といふのではありません。在來の良妻賢母主義は、婦人を無自覺のまゝで一種の型に入れようとするものであります。そこには人格を蔑視する思想と、婦人の能力を抑へつけようとする男子の利己

的な考へとがひそんで居ります。舊思想に囚はれてゐる男子から見ますと、婦人を在來の温良な良妻賢母主義で教育する方が、無難でもあり好都合でもありませう。けれども、良妻は必ずしも男子に盲從すべきではなく、賢母は家庭にのみ束縛さるべきではありません。新らしい解釋による良母妻賢は、知能の上からも職業の上からも、自由に行ける所までは行つて見る可能性がなければならないのであります。

この意味を考慮の内に入れて、私は婦人の本性が母になることである、といふのであります。從つて、それだけの理解のある男子と結婚するのでなければ、形の上では同じやうに母になつても、その精神に於て非常に距離のあるものになつてしまひます。婦人が人格の自由發展を望む以上は、かうして母たることの意義にも、深く思ひを致さなければならないと思ひます。

二七　婦人第一の願ひ

職業に就く婦人が次第に多くなりつゝあるのは、爭はれない近時の狀態でありますが、この傾向をそのまゝに進ませて行つたら、遂には家庭の荒廢を招くやうなことになりはしないでせうか。殊に、職業にのみ心身を勞してゐる婦人は、妻となり母となることの可能性が、だんだん傷つけられて行きはしないでせうか。さうなつた時に、婦人は果して幸福であり得るでせうか。婦人ばかりでなく、男子もそれで不幸を感せずにゐられるでせうか。――これは實に、兩性協力の文化を期待する生活にとつて、重大な問題であります。

一體、婦人が職業に就いたり、勞働に從事したりするのは、もとよりその報酬を得ることを目的としてをります。從つて、生活上働かなければ喰へないといふやうな婦人が、どうしても多く職業に就く譯であります。けれども、すべての職業婦

人が、みな物質的報酬（即ち給料や賃錢）のみを目的にして働いて居ると見るのは、やゝ早計に失します。勿論、働らく以上は當然その報酬を豫想しなければなりません。併し、働いて若干の報酬を得なければ生活に差支へるといふほどでなくても、無意味に遊んでゐては心の空虛を感ずるから、生活上の必要不必要に拘はらず、とにかく或る一つの仕事にたづさはつて、自ら生の充實をはかりたい、といふものも澤山あります。否、近代思想に養はれた知識階級の婦人は、むしろさういふ志望を持つてゐるものが多いのであります。

物質上の生活には困らないが、毎日何のすることもなく、お人形のやうにお行儀よく座つてゐるのは退屈でたまらない。それよりも自分の心身に適した仕事に就いて、忙しく活動したい。――斯う望むものが多いのであります。これは解放された婦人の心理として、當然のことであらねばなりません。

思想上にも境遇上にも、一たび解放されてその人格が認められたものは、自由

にその人格を發展させようと努めます。即ち、自分の思ふ通りに活動して、それに伴ふ報酬も得たい、快樂も自由に求めたいと望むやうになります。何の不自由もない家庭に育つて、ほしいと思ふほどのものは皆買つて與へられ、行きたいと思ふ所へは兩親に連れて行かれる、といふやうな境遇にある若い婦人が、それで滿足して居るかと言へば、決してさうではありません。昔のやうに、婦人はたゞ家庭の内につゝましく閉ぢ籠つてゐるべきものと强制されてゐた時代には、それで何の不足も言へた義理ではなかつたのでせうが、現代の解放された婦人思想では、たゞ兩親から與へられ、導かれるだけでは、どうしても慊りません。それよりも兩親や家庭から離れて、自分自身の意志を自由に働かせたい、といふ要求に促されるのであります。即ちこゝでは、物質的報酬の問題ではなくて、精神的自由の要求であります。

斯うして現代の婦人は、精神的自由にあこがれる心から、家庭を離れて職業に就からとする一般的傾向をもつてをります。中流以下の家庭にある子女が女中奉公に

出るのを厭がつて、工場で働くことを望むやうになつたのも、あながちその日その日に賃金が得られるといふ物質的原因からばかりではありません。女中奉公をして居れば、朝から晩まで（夜寝る時まで）主人の家といふ窮屈な空氣に束縛されて、嚴密にいへば寸時も氣を許す閑がないのです。然るに工場に行つて働けば、八時間なり十時間なりの勞働時間中こそ忙しい思ひをしますが、自分の家に歸つて來れば、解放された氣分になることが出來ます。殊に勞働時間中でも、同じやうな仲間のもと一しよに働くのですから、嚴格な家庭で行儀作法をやかましく言はれるほどの苦痛や束縛を感じなくても濟みます。卽ち、一は精神的自由があり、他は精神的束縛がある譯であります。

人格の自由發展を實現するために、田舍の婦人は都會へ出ることを望み、都會の婦人は家庭より出て職業に從事することを望む。——これが現代婦人思想の傾向であるとすれば、その結果は家庭の荒廢であると豫想しなければなりません。現に、

アメリカの繁華な都會では、婦人の慾望が身のまはりの裝飾や觀劇や舞踏會にのみ傾注されて、家庭のことを顧みる暇がない、三度々々の食事の支度をするのが手數だから、近所の料理店に行つて、自由に濟ませる、着物は裁縫專門のものに仕立てさせる、子供があると敎養に手がかゝるから、產兒の制限をするといふ有樣で、家庭はたゞ夜おそく歸つて寢る所、翌くる日外出するまでのお化粧場のやうなものである、といふ傾向になつてをります。

そんな極端な狀態になるのが、果して人類の幸福を增進する所以でせうか。そしてまた、それが婦人の望む所でせうか。

斯う考へますと、婦人には婦人の使命がある、いくら解放されたからとて、その本性や使命を曲げることは出來ない、婦人の解放はその本性に解放されなければならないのですから、自由を求め職業にたづさはるのも、その本性の發展を阻害しない程度のものであらねばならない、といふことになります。そこで、婦人の本性に

よる第一の使命は何であるかを考へて見る必要があります。それについて、私はこに一つの挿話を掲げます。

チョーサーの書いた『カンタベリー物語』の中に『婦人の願ひ』といふお話があります。御承知の通り『カンタベリー物語』は、カンタベリーへの巡禮者が宿屋に泊つてゐる中に、さま〴〵の人々がそれからそれへと思ひ〳〵のお話をはなし合ふやうに書かれたものであります。そして、湯屋の主婦の番になると、彼女は『婦人の願ひ』といふ次のやうなお話をしてをります。

それは遠い昔、アーサー王の圓卓の武士が巾をきかせてゐたといふ時分のこと、或る一人の武士が、武士の體面にかゝはるやうな不名譽なことをしたゝめ、王の怒りを買つて、もはや生きては居られないことになりました。併し、王妃はその武士を可哀さうに思ひ、王に願つて生命乞ひをしました。そのとき王妃は、その武士に向つて、

『もし貴方が私の謎をお解きになるなら、あなたの生命を助けてあげます。謎といふのは、およそこの世の中で、婦人の最大の願ひは何であるか、それが解ればよろしいのです。一ヶ年の暇をあげますから、この謎を解いてごらんなさい。』

と言ひました。武士は畏まつて諸方を遍歴しながら、至るところ、あふほどの人に、『婦人最大の願ひ』について尋ねました。或る人は美貌であると言ひ、或る人は美しい衣服や寶玉であると答へ、また或る人は秘密を守ることであると敎へました。併し、どれもこれも答へる人々によつて違ふので、普遍的の願ひが何であるか、どうしても解りませんでした。

その中に、月日は止みなく巡つて、やがて定めの時日が近づきました。武士は殆んど絶望して、或る森のほとりを悄然と歩いてゐました。すると、ふと彼方に二十四人の美しい貴女たちが、樂しさうにダンスをしてゐるのが眼につきました。

『あゝ、あの婦人たちに尋ねて見たら。』

武士は斯う思つて、その美しい群の方へ進んで行きました。けれども、彼がそこまで行かない先に、たつた今まで踊つてゐた美人たちの姿は消えて、あとには一人の醜い老女が蹲つてゐるばかりでした。老女は武士が近づくまゝに立ち上つて、

『あなたは何處へいらつしやるのです。何を捜していらつしやるのか、言つて御覽なさい。私のやうな老人でも、お役に立つかも知れません。私たち老人といふものは、それは悧巧なものですから。』

と言ひました。そこで武士は、

『お婆さん、よく聞いて下さつた。實は私は、生命にかけて解決しなければならない問題をもつてゐるのです。』

と、婦人最大の願ひが何であるかを解かうとして居ることを話しました。すると老女は、

『よろしい、それでは先づ私に、ある一つのことを約束して下さい。さうすれば私

は、あなたが生命にかけて解かうとしていらつしやる謎を解いてあげます。』

と言ひました。そこで武士が老女の望むがまゝに約束しますと、老女は武士の耳に何事かをさゝやきました。

『さあ、お解りになつたでせう。これでもう貴方の生命は大丈夫です。』

老女が斯ういふので、武士は喜んですぐ王城へ歸ることにしました。老女も武士とゝもに、王城まで跟いて來ました。

さて、武士が謎を解いて歸つたといふことが知れわたりますと、王妃をはじめ卑しい召使ひの女に至るまで、みんなその答を聞かうとして、一室に集まりました。王妃はその答の正否を判斷する裁判官のやうに、正面の座席に着いて、武士の答を待ちました。

武士は王妃の前に跪いて、

『王妃殿下！　婦人の願ひの數々ある中で、最も願はしいことの第一は、家庭の首

長となつて、その良人をして彼女の意志に從はしめることでございます。」と、明瞭に申し述べました。

聽衆の中には輕い動搖が起つて、ひそ〳〵とさゝやき合ふものがありました。けれども誰一人として、いま武士が述べた言葉に反對をとなへるものはありませんでした。

「ほんとにその通りです。あの人は立派に生命を助けられました。」

と、誰やらが小聲で言ひました。王妃は武士の悧巧な答によつて、非常な喜びを感じました。

×

このお話は、五百年ばかりも前に英國で語られたことではありますが、今日の時勢から見ても、一概に不適當であり偏見であるといふことは出來なからうと思ひます。

時勢の進み變るにつれて、婦人が家庭のみをその居城とすることの出來なくなつたのは、爭ふべからざる事實であります。けれども、全然家庭をよそにして、自分ひとりの意の向くがまゝに生活することを、終生の望みとして居るやうな婦人が、今の世に果して幾人あるでせうか。

生活上の必要に迫られて、家庭以外の職業に就いて、自由に活動して居る婦人でも、その心の奥底を叩いて見たら、温かな家庭の主婦となつて、その良人と同心一致の生活を營みたいといふ願望が、根强く横たはつてゐるのではありますまいか。藝術や宗教に身を委ねて、そこに自己の天職を見出さうとする婦人も、勿論あることはあります。併し、それはすべての婦人が望んで達し得らるゝ境地ではありません。普通の考へから推して行けば、婦人はやはり家庭の主長となることが、最も望ましいのではないでせうか。

家庭の主長になるといふ第一の願ひは、その形式に於ては、昔も今も殆んど變り

があります。けれども家庭といふものゝ實質、主長といふものゝ解釋の仕方は、時勢とゝもに著しく變つてきて居ります。チョーサアの時代の婦人が、ただ家庭の主婦となつて、その良人を自分の意志に從はせるのを第一の望みとしたからと言つて、それをそのまゝに現代の若い婦人に當てはめることは出來ません。交通が不便で、經濟狀態が單純であつた昔の時代では、家庭のみを理想的に善くして、そこに生活の意義を見出し、各自の幸福を求めることが出來たかも知れませんが、現今の社會の狀態では、どんな自由な圓滿な家庭を構成しても、たゞ家庭の內のみで生きることに滿足するのは、到底不可能なことであります。第一、家庭といふものが昔のやうな狀態では保たれなくなつてをります。殊に在來の日本の家庭は、時代思潮と著しくかけ離れてをりますから、今後の若い婦人たちは、今のやうな家庭の主長となることに甘んじては居なからうと思はれます。

日本在來の家庭では、すでに本書にもたびゝ記した通り、婦人の自由意志は殆

んど認められて居りません。家族の間では多少の自由が許されてゐたとしても、社會に對しては家長たる男子が、すべての責任者であり權利者でありました。從つて、いかに優秀な才能をもつてゐる婦人でも、一たび嫁いでその家風に縛られ、その家長に抑へつけられた以上、社會的には生きながら葬られたと極言しても憚らないやうな狀態に置かれるものさへありました。こんな自由束縛の家庭では、たゞ家庭の內でのみその良人を自己の意志に服從せしめても、決してそれで滿足することは出來ますまい。

それ故に、日本の現今の狀態では、先づ婦人が自己の自由意志によつて、自ら意義ありと信ずる家庭を構成することが、第一の願ひであらねばなりません。即ち、親や兄弟によつてつくられた家庭をそのまゝに繼承したのでは、たとひそれが理想的であつても、これを自分の家庭と稱することは出來ません。況して舅姑と同居するやうな家庭に主婦となることが、どうして婦人第一の願ひと言はれませうぞ。貧

しくても小さくても、とにかく家庭は自己の意志によつて、新たに作り出したものでなければなりません。自分でつくつた家庭であればこそ、はじめて自分がその主長となることが出來るのであります。

斯う考へて來ますと、自分自身の力で理想的家庭をつくるのが、婦人第一の願ひであらねばならないことになります。そして、家庭をつくる第一歩は結婚であります。すから、若い婦人は、自由意志によつて心身の健全な配偶者を選び、相互の愛情と理解とを根柢にした結婚をすることが、第一の問題であります。また既に結婚してゐる婦人は、夫婦共同の意志によつて構成した家庭を、更に理想的に改善してゆくことを期望しなければなりません。在來の家庭生活に不滿を抱いて、舅姑の干渉を苦しがつたり、良人の理不盡な抑壓に人知れず煩悶したりしてゐるのは、要するに『第一の願ひ』が素直に達せられないからではないでせうか。ほんとうに自分が一家の主長として、すべてのことに意志の自由活動を試みることが出來れば、現代の

婦人も決して家庭生活を厭ふものではありますまい。

この意味でならば、職業に就いてゐる（もしくは就かうとする）婦人も、家庭生活をその願望の第一に置くに相違ありません。たゞ家庭生活と職業とが、できるだけ障害を少なくして兩立し得るやうな狀態になれば好い譯であります。殊に、生活上の必要に迫られて職業に就いてゐる婦人に對しては、その結婚、出產、育兒などに對して、でき得る限りの機會と保護とを與へるやうに、社會的組織を改めてゆく必要があります。工場に於ける婦人勞働時間の制限、出產前後幾十日かの休養、母となつた婦人に對する待遇の改善――これ等のことが、婦人の職業に伴なつて當然起つてくる實際問題であります。そしてこれ等の問題をどう取扱つてゆくか、またどの程度まで解決を進めるかといふことが、やがて國家の盛衰、一般人類の幸不幸に影響を及ぼすのであります。

二八　不幸な婦人

チエホフの書いた『可愛いもの』といふ小説（英譯 "The Darling"，私は英譯本で讀んだのですから、この稿も英譯本によつてゐることを斷つておきます。）の女主人公オーレンカのことを、簡單に紹介して見たいと思ひます。

オーレンカは休職官吏レミヤニコフの娘で、おとなしい、同情ぶかい性質をもつてゐました。ものごしが淑やかで、感情の柔らかな彼女は、誰に對しても好い印象を與へますし、また自分からも常に誰かを愛せずにはゐられないといふ風でした。まだ學校に通つてゐる間には、フランス語の教師を好きな人として慕ひ、また一年に一度か二度か、遠くから訪ねてくれる叔母樣にも愛情を寄せました。それから自分の家では、たつた一人の老いたお父樣、もうながい間の病氣で、くらい室の安樂

椅子に寢たつきりになつてゐるお父樣を、オーレンカは衷心から愛してゐました。

その中に彼女は相當の年頃になつて、自分と同じ家の離室に住んでゐるクーキンといふ野外劇場の支配人と戀に落ちました。元來、憐れみぶかい彼女のことですから、クーキンを戀するやうになつたのも、普通一般の若い男女のそれとは、聊か行き方を異にしてゐました。即ち、クーキンといふ男はチィヴォリの野外劇場を經營してをりますけれど、毎日々々降りつづく雨で、思はしい興行も出來ず、缺損ばかり續けて、あはれに愚痴をこぼしてをります。その打ち悄れた態度と不幸な境遇とに、オーレンカは深く同情して、これを慰めいたはつて居る中に、いつしか彼を戀するやうになつたのであります。

まもなく、オーレンカとクーキンとは結婚しました。クーキンは打つゞく經營難で、いつも失望の色を浮べてをりましたけれど、オーレンカは誠の愛情を捧げてこれを慰め勵まし、共に事業の經營に力を注ぎました。彼女は自ら出納係となつて劇

場を整理し、役者の給金の支拂ひやら、收入高の決算やら、萬事を細かに取りさばいて行きました。暫らくする中に、彼女はもうすつかり劇場經營者としてこの世に生れてきたかのやうに、自分の知つてゐる人々に向つても、劇場が世界中で最も重要なものであることや、人々に眞の娯樂と教化とを與へるのは劇場でなければならないといふことなどを、まじめに話してきかせるやうになりました。

かうして新婚の二人は、とにかく樂しく暮してゐました。オーレンカは何時も滿足さうにいきゝと輝いた顏をしてゐるに引きかへ、クーキンはだんゝ顏色が惡くなつて、夜になると怪しい咳をすることさへありました。

『あなたは私の大事の可愛い人なのよ。』

オーレンカは斯う言つて、良人の身體に何かとよく氣をつけて、親切に介抱しました。

その中にクーキンは、劇場の一座を集めるためにモスクワに出て行きました。留

守中オーレンカは、夜も眠られないほどクーキンのことを思ひつづけました。何時あの人は歸つて來るだらう、この次の週の間には歸るか知ら？・と待ちわびてゐますと、ある夜、電報配達にあわたゞしく戸を叩かれました。

電報はモスクワのオペラ劇團の支配人から打たれたもので、クーキンの死んだことを知らせて來たのでした。オーレンカの驚きと歎きとは、どんなでしたらう。

『まあ貴方、私の可愛い人！　あなたは何だつて、この不幸な可哀さうなオーレンカを、たつた一人あとへ殘していらしたのです？　ほんとに私はどうしたら好いのでせう。』

彼女はあたり構はず、大聲をあげて泣き悲しみました。近所の人々も、彼女の不幸にひどく同情を寄せました。

併し、誰かを愛せずには居られない彼女――そしてまた誰かに賴らなければ生きて行かれない彼女は、クーキンを失つてから三ケ月ばかり經つと、プストワロフと

いふ親切な商人と懇意になつて、遂にその男と結婚しました。

プストワロフは或る材木置場の管理人でした。オーレンカはプストワロフと結婚してから、以前の劇場のことなどはすつかり忘れてしまつたかのやうに、材木のことに興味を覺え、且つそれに關する知識を養ふやうに努めました。良人が外出してゐる時など、彼女は事務所に座つて、帳簿の整理もすれば注文の發送もする、材木を伐り出す山のことも話せば、税金のことにも口を出すといふ有樣で、恰も自分は永年材木商を營んで來て、世の中で最も大切なものは材木である、と信じてゐるかのやうでありました。ほんとに彼女は、材木のことを夢にまで見る夜が度々ありました。

プストワロフはあまり娯樂を好まない男で、芝居を見に行くやうなことは、殆んどありませんでした。從つて彼女も、誰かに芝居見物を誘はれても、

『良人も私も、ちつとも芝居なんかへは參りませんの、つまらないんですもの。芝

居なんか見て何のためになるでせう。』

といふ風でした。

プストワロフが或る地方へ材木を買ひ出しに行つてゐる留守中、オーレンカは淋しくて淋しくて夜も眠られずに泣き通すことがありました。たゞ併し、同じ家の離室に住んでゐるスミルノフ（聯隊附の獸醫）といふ若い男が、たま〳〵訪ねて來てトランプをして遊んだり、身の上話をしたりすることがありました。スミルノフには妻子があるのですが、或る事情で別居してゐるのでした。オーレンカは彼に向つて、

『奥さんと仲直りをしなくちゃいけませんよ、ねえあなた、みんなお子さんのためですよ。』と言つたこともあります。

六年間、オーレンカはプストワロフと平和に暮しました。そしてまた彼女は、不幸にもプストワロフに先立つて逝かれました。彼女は以前、クーキンに死なれた時

と同じやうに、身も世もあらぬ思ひで歎き悲しみました。

併し、誰かに頼り、誰かを愛さずには生きてゐられない彼女は、まもなく獣醫スミルノフと親しくなつて、家畜の病氣のことや、屠獣所のことなどを、誰に向つても得意に話しかけるやうになりました。

その中にスミルノフは、遠い地方へ轉任することになつて、オーレンカはまた一人取り殘されました。彼女の父はもう疾うに亡くなつてゐるし、彼女自身も寄る年波で、ます〳〵生の孤獨を感じ、日に〳〵痩せ衰へて行きました。もう彼女の春は過ぎ去つてしまつて、今や新らしい不安定な生涯がはじまらうとしてゐるのです。

彼女は家の入口の階段に腰をおろして、チィヴォリの方できこえる賑やかな音樂や花火の音をきいても、何の感興も起りません。彼女の心は、空虛になつてゐるのです。彼女は、もはや自分のものとしては、何一つまとまつた意見を持つことが出來ないのです。彼女は、周圍のものを見たり聞いたりして、それを知ることは出來

ても、それに對する意見を持つことが出來ない、それが彼女をして一しほの寂寞を感ぜしめる所以なのです。

斯うしたみぢめな狀態で、幾年か過ぎた夏の或る日の暮れ方、スミルノフが突然音づれて來ました。オーレンカは自分の眼を疑ふかのやうに、暫くは驚喜して口もきけませんでした。併し、スミルノフがもう聯隊を退いて、この地に妻子とゝもに永住すると聞いた時、彼女は氣も轉倒するほど喜びました。

『まあ！……そして奥樣は何處にいらつしやるのですか。』

と、オーレンカはスミルノフに問ひかけました。

『子供と一しよにホテルに居ます。私は今下宿をさがして居るのです。』

スミルノフは斯ういつて、今度子供を學校に入れなければならないことなども話しました。オーレンカは、それでは自分の家を宿にしてくれと言つて、すぐに家の掃除に取りかゝり、屋根のペンキも塗りかへ、剝げた壁も塗り直すといふ有樣で、

歡喜に輝いた顔であちこちと歩き廻りました。彼女はながい眠りからさめたやうに、身も心もいき〳〵と復活しました。

やがて獸醫の妻と子供とが來ました。子供は十歳になつたサアシャといふ可愛らしい男の兒でした。オーレンカはその子供を可愛がりました。夕方などサーシャが食堂で勉強して居ると、彼女はその傍へ行つて、一しよに地理の暗誦をしたり、將來の學科の選び方について、サーシャの兩親と話しあつたりするやうになりました。

サーシャはいよ〳〵學校へ通ひはじめました。彼の母はハルコフといふ所にゐる妹を訪ねて行つたきり、歸つてきません。スミルノフはスミルノフで、毎日家畜の檢査に出あるいて、時によると二日も三日も歸つて來ないことがあります。斯うしてサーシャは、まるで兩親からは棄てられたやうになつたので、その一切の世話を、オーレンカが我が子のやうにして引受けることになりました。着物のこと、喰

べものゝこと、毎朝學校へ行くのにおくれないやうに起してやること、何から何まで、サーシャのことゝ言へば彼女は夢中になつてしまました。近所の人に對しても、

『學校のことも、この頃は大變むづかしくなりましてねえ。昨日も一年生に、寓話の暗記と、ラテン語の飜譯と、數學の問題が一つと課せられましたの。小さい子供に、どうしてこれが皆出來るものですか。』

といふやうなことを繰返して話しかけました。

今や彼女は、子供の敎育につき、將た學校のことについて、確かにまとまつた意見を持つことが出來るやうになつたのです。サーシャの未來を想ひ描くことによつて、彼女の胸にも樂しい希望が輝き出したのです。ほんとに彼女は、この半年の間に、見違へるほどいき〳〵と若返りました。

或る夜、彼女もサーシャも眠りに就いて居ると、突然戸口をあわただしく叩くものがあるので、彼女はびつくりして眼をさまし、

『あゝ電報だ、ハルコフから電報！　お母さんがサーシャが呼び寄せるのだ。あゝ、どうしよう。』

と、絶望して身をふるはせました。

『あゝ、私ほど不幸なものはこの世に居ない。』

と、彼女は思ひました。併し、續いて聞える戸外の人聲に、さつき叩いたのは電報ではなくて、スミルノフが倶樂部から歸つて來たのだといふことが解りました。彼女はやつと重荷をおろしたやうに、だん〳〵平靜な心に返りました。

こゝでこの小説は終つてをります。

× ×

この小説を讀んで第一に考へさせられるのは、オーレンカが誰かを愛せずには居られない、といふことです。これを反面から言ひますと、彼女は誰かに愛せられずには生きて居られなかつたのです。更に平たく申しますと、誰かに寄り縋らなければ、自分一人では纏まつた意見をも持つことが出來なかつたのです。そしてこれは、單にチエホフのオーレンカばかりでなく、多くの無自覺な婦人に當てはめて見ても、あながち間違つた見解ではなからうと思はれます。

『貞婦兩夫に見えず』といふ貞操觀をもつてゐる日本人から見ますと、オーレンカのやうに夫の死後すぐに愛するものを見附けて親交を結び、それと別れると、更にまた第三の男を求めるといふやうに、次から次へ心を移してゆくものは、許すべからざる不道德として蔑まれることでせう。けれども、兩夫に見えない所謂貞婦が、夫の死後、どんな寂しい心で人知れぬ煩悶を重ねてゐるかを思へば、因襲にとらはれた偏狹な道德觀と自然の人情との間に、恐るべきギャップと鬪爭とのあることを思はずには居られません。

オーレンカは愛するものなくては生きてゐられないといふ、一種特別の婦人であるかも知れません。併し一般婦人の心に、彼女の情愛と同樣の傾向が多少でもあ

るとすれば、婦人の獨立問題や再婚問題について、これまでの考へ方とは違つた見地に立つて、婦人生涯の幸福をはかることに深い用意を拂はなければなるまいと思ひます。

即ち、婦人は職業や技能の上で獨立自營することは出來ても、生涯それで押し通すことが困難なばかりでなく、その精神上にも何等かの縋りどころがなければ、到底寂しさに堪えられないのであります。それは必ずしも夫として頼るべき男子でなくても、オーレンカのサーシャに於けるやうに、自分の愛する子供であつてもよい譯です。夫もなく子供もなく、ただ一人生きてゆくといふことは、婦人に取つてどんなに寂しいことであるか解りません。アーヴィングが『スケッチ、ブック』の The Broken heart に記して居るやうに、男子は必ずしも愛ばかりに生きてゐるものではなく、廣い社會に出て、利益や功名のために奮鬪することに慰安と希望とを見出します。けれども婦人にあつては、情愛がその全生命です。"A Woman's whole life is

a history of the affections. The heart is her world"

夫に別れた婦人が、當座の悲しみの甚だしいのに似ず、その悲しみが薄らぐや否や、第二の夫を見出し、第三の夫に縋るといふのは、あまりに浮薄な心であるやうに思はれないでもありません。併しこれは、淫蕩的氣分から來た浮薄ではなくて、內心の寂しさに堪へられないため、何等かの頼るべきもの、慰めるべきものを求めようとして、殆んど本能的に動いてゆく心の經過に他ならぬのであります。その證據には、オーレンカも相當の年齢になつてからは、スミルノフの子のサーシャに、母としての愛情を注いで居るではありませんか。

彼女はサーシャをまるで自分の子供であるかのやうに可愛がつて、毎日サーシャが學校へ行くのを送つて行つてやります。サーシャは他の友だちに對して、年とつた婦人に送られて來るのが耻かしいので、オーレンカに早く歸つてくれ、と言ひます。そして、自分一人で校門の方へと驅けて行きます。オーレンカは、その後姿

をぢつと見送つて、『全身に利己心なくサーシャのために捧げてゐること』を感じます。そのために彼女の母としての本能性が、すべてハツキリと目さめて來ます。サーシャは彼女の眞實の子でないけれども、『この子のためなら、あの頬の靨のためなら、彼の大きな帽子のためなら、命を捨てゝも惜しいとは思はない』といふほど、それほど彼女はサーシャに對して、母らしい感じを持つやうになつてをります。

この點から推して考へますと、もしオーレンカがたび〳〵良人に死に別れる不幸に遇はずに、始めからクーキンなりブストワロフなりに嫁いだまゝ、サーシャのやうな子供を產んで、平和な家庭をつくることが出來たら、きつと良き妻となり良き母となつたに相違ありません。さうならなかつたゝめに、彼女は生き甲斐もない寂しさを感じたのではないでせうか。かう考へて來ますと、婦人の生涯の幸福が何處にあるかといふことも、一般的に察知し得られると思ひます。

二九　母の愛

私には、二歳の時に父を失つた姪が一人あります。十歳になるかならないで、母に死にわかれた甥も姪もあります。何れも可哀さうな子供たちですが、後者は遠く離れた所に住んでゐるので、顏を見る機會もなければ、思ひ浮べることも少ないので、その悲哀を痛切に感ずることは比較的稀です。これに反して前者は、近い所に居てしば〳〵會ふことがありますから、何かにつけて涙ぐましさを感ずることが多いのであります。

その姪は、父の顏も見覺えてゐないのですから、父といふものに對する懷かしさも親しみも知らう筈はありません。當人はなんにも知らずに、不如意な母の手一つに育てられてゐることを、悲しいとも感ぜず、不足とも思つては居ないのですが、

私の目から見ると、さうして無邪氣に遊んでゐることに、一しほの不憫が加はります。父の聲もきゝ覺えてゐないものが、その母から敎へられたのでせう、「お父樣は？」と尋ねると、佛壇の前に行つて、そこに祀られてある位牌や寫眞を指したり、何々院何々居士などゝ廻らぬ舌で法名を稱へたりします。その樣子の無邪氣なのに釣り込まれて、「お悧巧さんだね、よく知つてゐますね。」などゝ褒めてはやるものゝ、涙なしには見られませんでした。

母一人子一人。父のない子供も人なみに年をとつて、今は小學校へ通ふやうになつてをります。幼い時から今までの生ひ立を見ますと、片親であるだけに、母と子との情愛は、一しほ深いものがあるやうです。母を離れては何處へも行かない、遊びに夢中になつてゐる時でも、思ひ出したやうに顏をあげて、『母さんは？』と呼んで見て、母が何處に居るかを確める。——それが私の姪の幼時の癖でした。母の傍にさへ居れば、日が暮れようが雨が降らうが、よしや世の中の一大事件が起らうとも、幼兒に取つては何でもありません。それほど母のふところは温かであり、平和であり、信賴すべきものなのです。また、それほど幼兒は母の翼の下に愛し温められなければならないものなのです。

私の姪も、將來世の中のことがだん〴〵解つて來るにつれて、『父があつたら——父が生きて居てさへくれたら！』と、衷心から亡き父を思ふ日がたび〴〵あることでせう。けれども今までは、父があつても無くても、殆んど何の相違もないやうに育つて來ました。少なくとも當人に取つては、父のないといふことを悲しく感じたり、不幸だと思つたりしたことは、恐らくはなからうと思はれます。

けれども、母を失つた子供は、父を失つた子供に比べて遙かに多くの悲哀を感ぜずには居られません。（主觀的にも客觀的にも）父がどんなに優しい情と細心な注意とをもつて育てゝも、母のない子供は、必ず或る物足りなさを感じて、その心に消しがたい一點の暗い蔭を抱くに相違ありません。母の愛と父の愛とは、程度の差で

はなくて、本質的に違つた所があると、私は信じてをります。この點から考へますと、父親のない姪よりも、遠くに離れてゐる母のない甥姪の方が、どんなに可哀さうであるか解りません。彼等はその温かい母の愛に、もはや再び浴びることが出來ないのですから。

幼少の子供がその母に對して、地上の何ものにもかへ難い愛慕を寄せるのは、今さら言ふまでもないことですが、成長の後、戀を知る年頃になつても、一たび母の愛を思ふ時には、熱烈な戀心をも飜さずには居られないやうな例が、隨分少なくありません。殊に、母一人娘一人で育つて來たものなどは、どんなに勇猛な心をもつて或る事に向つてゐる時でも、顧みて「こんな事をして母に心配をかけては……」と思ふと、われ知らず逡巡せざるを得なくなるやうであります。

嘗て少年監獄に勤めるゐる人から聞いたことでありますが、教誨師の説教中に居睡りをするやうな性質不良の少年でも、その母を思ひ起させる話をして聞かせる

と、きつと改悛の色を現はす、といふことであります。(勿論これは、母の愛を浴びたことのあるものに對してのことで、生れながら母の愛を知らないものには、その心もちは解らないでせうけれど)それほど母の愛は、子供の心に深く泌み込んでゐますから、監獄の中であんまり母のことを感動的に話されると、痛切に自己の罪過を悔いて、縊死するものも少なくないといふことであります。

牢屋に入れられてゐるやうな不良少年少女でも、一たび母の愛を想ひ起すと、それほど強く感動するのです。ほんとにどんな暗い所でも、どんな冷たい所でも、母の愛はこれを温め、これを明るくすることが出來ます。從つて、母の愛によつて育てられたものは、たとひ父の庇護と教訓とを受けなくても、その境遇の幸福を感謝しなければなりません。その點から推し及ぼして考へましても、婦人が良き母になるといふことは、どんなに大きな力であり、またどんなに尊い使命であるか解りません。

『賢父の子必ずしも賢ならず、賢母の子必ず賢なり』と說いた學者があります。實際、古今東西の偉人傑士の傳記を見ましても、その母の感化を受けてさうなつたものが、父のそれよりも遙かに多いではありませんか。母性尊重の問題も、この點から考へて一層意義深いものとなると同時に、よき母性たらんがための覺醒が、婦人に取つて極めて大切なことゝなるのであります。

三〇　家事に對する理解

近頃は都會でも田舍でも、女中を雇ひ入れるのにその志望者が少なくて、非常に困難を感ずる狀態であります。これは產業の發達につれて、職業に就く女子が多くなつたのと、一面ではまた女子が個人的に目さめて、在來の家庭に於ける女中のやうな束縛された境遇に置かれることを、厭がるやうになつたのとに因るのであります。從つて今後、女中をおく家庭では、その取扱ひ方や待遇を、これまでとはよほどかへて行かなければなりません。

女中といふものが、雇はれてゐる家の人々と主從關係を結ぶか、もしくは全然その家族の一員となりきつてしまへば、これまでの通りで不平なく働くことが出來るでせう。けれども給料によつて雇はれるとなると、どうしても他の工場や會社に出て働くのと、その報酬はどちらが多いかといふことを比較するやうになります。そしてまた働く時間も、女中は朝から晩まで間斷なく、時としては夜眠つてゐる間にでも、主家の都合で叩き起されることがありますから、工場の勞働時間に比べると、緊張してゐないだけ、それだけ長いかも知れません。即ち、日々の仕事はさほど烈しい勞働でないにしても、いつどんな用事を命ぜられるか解らないのですから、自分自身の時間といふものがありません。從つて、別にこれといふ用事がなくて

も、女中として雇はれた以上は、氣をゆるして自分の勝手なことをする譯には行かないのであります。

然るに工場や會社になりますと、一定の時間内だけ專心に働けば、あとは何處へ遊びに行つても、自分自身の仕事をしても、當人の勝手次第であります。即ち、一日の務めを終れば、心身ともに解放されて自由になります。この點に於て、窮屈な女中奉公をするよりも、他の職業に就いた方が氣樂で好い、といふ考へを起させるのだらうと思ひます。

勿論これまでの日本の家庭では、女中を單に使用人とばかりは見做さないで、當人の希望によつては閑々に裁縫や手藝も敎へる、一通りの行儀作法をも敎へるといふ有樣で、一種の家庭敎育を施してゐたのであります。それ故、雇はれる方でも、學校へ行く代りに良家の女中となつて、嫁入前の躾を受けることを喜んでゐたのであります。

けれども現今の家庭では、(殊に都會の中流階級の家庭では) 女中にそれだけの家庭敎育を施し得るやうな主婦は、極めて少ないと言はねばなりません。第一、時間に於てそれほどの餘裕がありません。女中を使つて家事を執らせるやうな家庭の主婦は、大抵は子供の世話に追はれるとか、交際上毎日のやうに外出しなければならないとかいふ有樣で、しみじみ女中に物を敎へる閑を持つてゐないのが普通であります。またその閑のある主婦は、一向に裁縫や禮法の心得がなくて、人に敎へるどころか、却つて自分が習はなければならないやうなのもあります。たゞそこに氣がつかずに、毎日のらくらと遊んでゐるに過ぎないものも、隨分少なくはありません。

とにかく、いろ〳〵の點から觀察して、今後女中にならうとするものがだん〴〵少なくなることは、爭はれない傾向であります。さうなると、家庭のことは厭でも應でも、主婦自身がこれを取扱つて行かなければなりません。世間體をかざるため

に女中をおいて、主婦は手をつがねて遊んで居るといふやうな時代は、今まさに過ぎ去らうとして居ります。どうしても女中を使はなければ、家事の片がつかないやうな所では、やむを得ず非常に高い給料を拂はなければならないことになります。現に今、女中を置くために一家の經費が嵩んで、生活難に苦しんでゐるものも、なか〳〵多いのですから、もし女中を廢しさへすれば、それだけ生活費に餘裕が出て來る譯であります。

そこで主婦たるものは、どうしたら女中を使はずに濟むか、といふことを考へなければなりません。それは言ふまでもなく、主婦自身が働くより他に仕方のないことです。自分で働いて見れば、在來の家庭の仕事が、いかに煩はしいものであり、また如何に勞力を徒費することが多いかゞ解るでせう。從つて、それを如何に改善すべきかといふことが切實に感ぜられる筈であります。

日常の家事を簡便に濟ませ得るやうに、これまで幾度となくその改善が叫ばれま

した。日常生活の改善だとか、家事經濟の執り方だとかいふことは、學校でも社會でも、もう聞きあきるほど聞かされてゐますから、今さらそんな問題を提唱しても、『またか』と冷笑されるかも知れません。それほど繰返されてゐる問題でありながら、實際に改善の効があらはれないのは、要するに主婦自身がその事にたづさはらないからです。不便なことや面倒くさい仕事を女中任せにして、自らその苦痛を感じないからです。もし主婦自身が毎日その仕事を片づけて行かなければならないとなれば、在來の煩はしさを輕減するために、何とか新らしい工夫をめぐらさずには居られなからうと信じます。

女中任せにしてある家事は、どうも卑しいことのやうに思はれて、これまで敎養あり資產ある主婦は自らそれに手を着けるのを恥かしいことのやうに誤解してゐました。女中も使はずに、主婦や娘が臺所に出て働いたり、洗濯をしたりするのは、世間體が惡いと思つてゐるものもあります。けれども、主婦として自ら家事を執る

のは、決して恥づべきことでも卑しいことでもありません。外に出て職業に就くのも、内にあつて家事を執るのも、仕事の價値に於ては何等の異なるところはないのであります。もし今後、すべての主婦が自ら家事を執るやうになれば、婦人として家事にたづさはらずにあることが、却つて恥かしく感ぜられるに相違ありません。斯くして婦人はその本務として、家事にたづさはることゝ子女の教養に從ふことゝに、大きな喜びを覺えるやうになるのであります。

現今、中流階級にある都會の婦人は、家庭でその手足を勞することが、次第に少なくなりつゝあります。それは文明の利器が普ねく家庭に應用せられて、それまで婦人の手を要してゐたことが、今はさうでなく濟まされるやうになつたからであります。從つて、女中なしに主婦自らが働くにしても、さほどの繁勞を感ずることはありますまい。殊に、家庭生活の樣式を改良して、時間と勞力とを經濟的に用ひるやうにすれば、主婦以外に多くの人手を要するには及ばなくなるだらうと思ひま

す。女中がなければ一家の事務が片づかないといふやうでは、主婦たるものゝ恥ではありませんか。

斯うして、家庭に女中を使ふことを廢するやうになれば、それだけの女子が他の生產的事業に從ふことが出來る譯であります。現にその傾向があるために、女中奉公に出る若い女が少なくなつたので、これは一面から考へますと、婦人問題の進展上、喜ばしいことゝ言はなければならないのであります。

世の中の事情は日一日と進み變りつゝあるのに、家庭に於ける婦人の仕事のみは、依然として遠い昔からの傳統をそのまゝに受け繼いでゐるのでは、あまりに情ないではありませんか。而もその情ない狀態にあるため、日常生活に幾多の矛盾があり不便があつて、勞力の上でも經濟の上でも、馬鹿々々しい損失を招いて居るのであります。世の中の事情を昔ながらに堰きとめて、文明を逆轉せしめることの不可能なのは、今さら言ふまでもないことですから、どうしても家庭の仕事を現代

の生活に適應するやうに改めて行かねばなりません。そしてそれは、主として主婦たるものゝ頭腦と手とに俟たなければならないのであります。

試みに家庭から一歩外へ踏み出してごらんなさい、電車があり自働車があつて、それに乘るにはなるべく輕裝する必要があるのに、ぞべ〳〵とした裾のながい着物をきて、急いで歩けば轉びさうに不安定な重い下駄をはいてゐるのは、不便不調和の甚だしいものではありませんか。これを改めて、輕便に外出し得るやうにしたいと思へば、どうしても疊の上に座ることの利害にまで溯つて考へなければなりますまい。たゞ服裝のみを改めても、家の中にゐる時と外へ出る場合と、一々これを着かへなければならないといふやうでは、却つて不便でもありますし、また二通りのものをつくる經費にも影響して來ます。(洋服を着る男子の大多數は、いま現にこの不便と不經濟とになやまされて居ります。)それ故に、服裝を改良しようといふには、どうしても住宅の構造をも改めなければなりません。このことについては、

すでに本書の『服裝と個性』の中にも述べておきました。また、食物についても交際上のことについても、これと同樣のことが言ひ得られるのであります。

これ等の改善、考案に要する知能は、決して低級なものであつてはなりません。新らしい思想によつて、快適な生活を試みようとする婦人の豐富な知識と經驗とに俟たなければならないのであります。(「若き婦人の結婚と自覺」第二篇「日常生活」を參照。)

想片

思ふことの表現

思ふ通りのことがすら〳〵と書けたら、どんなに好い氣もちだらうと、私は筆の滋る毎に情なく感じます。口で述べる時にも、私はなか〳〵思ふ通りのことが言へないで困ります。適當な言葉が出てこなかつたり、言ひ方が變に廻りくどくなつたり、言葉が足りなかつたり、時には心に思つてゐることゝ見當違ひの意味に取られるやうな言ひ方をしたりして、どうも自分の意志を明確に發表することの出來ない場合がたび〳〵あります。

筆で書く時には、それでも靜かに考へながら書きますから、足りない所をあとで

補つたり、惡いところを消して直したりすることが出來ます。けれども口で述べる場合には、消すことも出來なければ、途中であれかこれかと適當な言葉を考へてゐる暇もありませんから、なほさら困難を感じます。言つてしまへば駟も及ばずで、もうそれまでゞす。

尤も、普通座談の場合には、筆で書くよりも口で言ふ方が解り好いと思ひます。座談の時と同じやうに、そのまゝ筆であらはすことが出來たらと、私はそれを望んでゐるのです。どうも筆で書くものには、飾り氣が多くていけません。筆を休めて考へる自由があるだけ、それだけ技巧が加はります。率直に書いてしまへばよく解ることを、もつと綺麗な言葉で現はさうとか、もつと新らしい表現法を取らうとかいふやうなことを考へるために、却つて廻りくどくなつて、意義の晦澁を招くこともあります。何等の技巧を用ひず、衒氣を交へず、親しい人と對座して語り合ふやうに、思ふまゝのことを書いて見たいと思ひながら、さて筆を取ると、やつぱりさ

うは書けません。尤も、場合によつてはいろ〳〵の周圍の事情から、思つたまゝを書いては惡いこともあります。何れにしても困つたものです。

それにしても私は、出來るだけ安易な態度で、時々の感想や見聞を書きつけて見たいと思ひます。それは本書の讀者と、親しく相對して語り合ふ氣分になりたいからであります。そしてまた、本書の讀者が私に對して好感をおもち下さるにせよ、或は反感をお抱きになるにせよ、とにかく私といふものを多少でも知つて居られると思ふからであります。斯うしてお話する私自身の思想生活の斷片が、讀者の心に少しでも共鳴を與へるとすれば、それは望外の喜びであります。

作品の内容

思つたまゝのことを發表するのは、筆によるにしても口で述べるにしても、隨分むづかしいことである、と私は前に記しました。若い人々の文學的作品などを讀んで見ますと、なほさらこの感が深くなります。文章が飾つてあるために、或はむやみに新らしがつてゐるために、まだ思想が十分にまとまらないのを、知つたかぶりに書いてあるために、その眞意が何處にあるのか、解釋に苦しむやうな文章をよく見受けます。なぜもつと素直に書けないか。――私自身に對する小言でありますが。若い人々に向つても、斯ういひたい場合がしばゝあります。

それは書き慣れないためもあるでせう、適當な言葉の見つからないためもあるでせう。併し一種の衒氣や虛飾が、文章の平明を妨げてゐることも、爭はれない一ツの原因であります。お化粧が婦人に附きものであるやうに、その作品にも辭句を美しく飾り立てようとする傾きがあるのは、無理のないことかも知れません。けれども、粗野なものゝ厚化粧が醜いと同樣に、貧弱な內容を美しい辭句で飾り立てるのも、却つて賤しい感を起させます。何と言つても、作品の價値はその內容によつて高くもなり低くもなるのですから、辭句の修飾よりも、その內容――思想を豐富にすることに思ひを潛めなければなりません。

また、自分のことばかりを誇張して書きたがるのも、若い人々に共通の短所ではないかと思はれます。自分のことを書いた作品は、その當人に取つてこそ捨てがたいものでせうが、他のものが讀んでは、さほど感興の多いものではありません。併し、まだ經驗の乏しい若い人々が、何かまとまつたものを書くとすれば、どうしても自分自身のことでも書くより他、材料の採りどころがありません。從つてその作品が、自己告白になり易いのは、むしろ止むを得ないことゝ言はなければなりますまい。

けれども、自分のことを書くにしても、その態度の如何によつて、僞らざる告白にもなれば、自己辯護にもなり、また客觀的にみた第三者にもなります。自分のこ

とより他に書くべき材料がないとすれば、せめては離れた態度で、出來るだけ客觀的に描寫して行くことを心がけるのが肝要であります。

また、自分の經驗は貧しくても、それに深みを持たせるために、十分よく考へて見る必要があります。たゞ目前の一寸した出來事を捉へて、動搖しやすい感情に驅られて書いたのでは、さうよいものゝ出來る譯はありません。悲しいことにしても喜ばしいことにしても、その激情に囚はれてゐる間は駄目です。もう少し心を鎮めて、その悲しみが何處から出て來たか、その喜びは眞に喜ぶべきものであるかどうか、更にまたその悲しみや喜びも、自分でない他人から見たらどうであらうか、といふやうなことを考へた上、さてこれを書くべきかどうか、と自ら顧みると、一時は書きたくてたまらなかつたことも、書くのが耻かしいと思ふやうにならないとも限りません。つまり、自分のことを書く場合には、出來るだけ冷靜にこれを解剖し、批判することを忘れてはならないのです。言葉をかへますと、小主觀に捉はれ

ずに、客觀的に事件を取扱つて行く方がよいのであります。

人生に對して廣い理解のないものは、自分のことばかりを過大視して、平凡なことをもさも大事件のやうに取扱ひたがる弊があります。無論その幼稚なところに、純眞な心のひらめきを見ることがありますから、一概にこれを貶す譯には行きません。けれども、廣く世の中を見渡した時、また人生の事象に深く思ひを潛める時、自分ひとりの日常些細な出來事を、それほど大袈裟に吹聽して、同情を强要するにも及ばないといふことが、自ら諒解されます。

たとへば失戀の悲しみを味はふにしても、當人は廣い世の中でたゞ自分ばかりが、苦しめられ、見すてられ、踏みつけられるやうに、はかない運命をもつて生れて來たものと速斷してしまひます。けれども、失戀に泣く若い男女は、世の中に數へつくされないほど澤山あります。苟くも戀と名のつく戀をしたもので、失戀の苦い味を知らないものはないと言つても、必ずしも過言ではありますまい。從つて、

戀愛事件に經驗のあるものから見たら、或る一人が聲を大きくして叫んでゐる失戀の悲しみも、當然普通のことゝしか思はれないかも知れません。それを筆にし口にして世に發表するには、その事件に特殊の所があるか、深刻なところがなければ、讀むものに何の感興も與へなからうと思ひます。

戀愛事件に限らず、どんなことを考へる場合にも、自分といふものをもつと廣い世の中に持ち出して、周圍のものと比べて見ることが肝要です。自分ばかり珍らしがつてゐることでも、世間ではもう時勢おくれとして片づけかゝつてゐるかも知れないのです。それを知らずに、さも自分の一大發見であるかのやうに、得々として書き立てゝも、畢竟世の物笑ひになるに過ぎません。たゞ自分の書いたものを誰にも見せずに、ひとりで書いて樂しんでゐるのなら、どんなことを書かうと、誰に遠慮もいりません。併し、苟くも自分の書いたものを誰かに見せようとする以上は、出來るだけ深く考へ、ひろく世の中のことを知つて、その作品に價値あらしめるや

うに用意しなければなるまいと思ひます。

安逸と誘惑

人間は（と全稱命題で書くと獨斷になるかも知れませんが、少なくとも私といふ人間は）安逸な境遇に慣れやすいやうです。遠い將來に大きな望みを抱いてゐるものでも、それが目の前に迫つて來るまでは、日常生活の雜多な事柄にとりまぎれて、やゝもすればその場のがれの安逸を貪らうとします。『なまけてはいけない、シッカリしろ！』斯う言つて、絶えず自分で鞭打たなければなりません。ですから私などは、友人とか新聞とか雜誌とかによつて、常に刺戟を受けてゐなければ、どうも緊張した氣分を續けてゆくことが困難です。

學校を卒業した當座には、まだ〳〵これから大いに勉強するといつて勇み立つた秀才が、いつとはなく日常生活の虜になつて、小さく納まつてしまふといふやうな例は、男子にも婦人にもかなり澤山あります。目の前に競爭者があるとか、何かの試驗を受けるとかで、一生懸命に勉強するのは、さほど苦しいことではありません。けれども、誰と目ざす競爭者もないのに、たゞ自分自身が絶えず向上の一路を辿らうといふのは、非常にむづかしいことです。自分の心に克つこと。——即ち自分のなまけ癖を征服して、現在の境遇から脱け出して、高く進んで行かうとするのは、よほどの努力がなければなりません。

私たちの最も恐るべきことは、現在の境遇に慣れるといふことであります。不平を不平と感ぜず、悲しみを悲しみと思はないやうになつては、もう進歩も變化も望まれません。私たちは常に現在以上により善き境遇と、より高い思想とを望んで、少しの間も停滯しないやうに努めなければならないのです。停滯すれば腐敗を招きやすい、安逸に慣れると誘惑にかゝりやすい。どうかして私は、私の心と境遇とに安逸を貪る暇のないやうにしたい、と望んでをります。

淋しい道

ともすれば安逸に慣れようとする心に鞭打つて、『ぐず〳〵しては居られない』と自ら勵ます毎に、私は行く手の遠く淋しいのを感じます。

自分の辿るべき道は、どこまで行つても自分ひとりである。いくら淋しくても獨りで歩かなければならない。誰ひとり話相手になつてはくれない。またそれを求めたとて求め得られる譯ではない。さびしい人生である。——斯う思つて、ぢつと自分の心をみつめてゐますと、われにもなく涙ぐましくなります。感傷的の安價な涙

と見えるかも知れませんが、私に取つては眞劍の冷たい苦い涙です。

そんなに一人で淋しがるには及ばない、衆とゝもに喜び樂しんで、なるやうになる生活に引きずられて行つたらよいではないか。斯う思つて、人生だの理想だの哲學だの人道だのといふことを、すつかり拋つてしまつた心やすさを想像して見ることもあります。けれども、さうして衆とゝもに笑ひ興ずることには、ひとりで淋しがつてゐるよりも、なほ大きな苦痛を感じます。のんきに衆と親しんで行かうとするのを、私の性格がすぐに裏切つてしまひます。どうしても孤獨であるより他に仕方がないのです。

それならば、淋しくても苦しくても、やつぱり私は私の行くべき道を辿らなければならないことになります。他人に追從して、平坦な道を歩かうとするからこそ、心にもないお世辭を言つたり、忍ぶべからざる汚辱を忍んだりしなければならないのではありませんか。さうして、絶えずおど〳〵して周圍を見まはし、些細なことにも不安を感ずるといふのは、何たるみぢめなことでせう。それよりも、私は、ひとりで考へ、ひとりで勵まし、ひとりで憐れみつゝ、自分自身の道を歩いて行つた方がよいと思ひます。

多數者のあるいてゐる道は、或は平坦であるかも知れません。併しそこには陷穽と嫉視と虛飾とが充ちてをります。眞實を愛して、自ら安んずる所を求めようとするものは、やつぱり獨自の淋しい道を歩くより他に、行き方がないのであります。

途上の試煉

『私ほど不幸なものが、世の中にまたとあるでせうか。ほんとに歎いでも歎いでも、まだ歎き足りないんですもの。』

斯ういつて悲觀する人がよくあります。これは勿論、苦しい時に不用意に出る歎聲で、實際世の中にそれほど不幸なものがあるかないかを、廣くしらべた上で言つてゐるのでないことは明らかであります。中には、自分の不幸や苦痛がどの程度のものであるか、それすら深く考へないで、たゞはじめから自分を不幸なもの、不運なもの、ときめてかゝつてゐるのではないかと思はれることもあります。

この世は苦しみの場所であると言はれる位ですから、苦痛なくして生き得られる筈はありません。また人生は絶えまなき爭鬪であるとも言ひます。否、人間ばかりでなく鳥も草も木も石も、萬物みな相爭つてゐると見ることも出來ます。その鬪爭の世の中に於て、傷ついて悲しむもの、破れて歎くものがあるのは、當然のことゝ言はねばなりません。そして、一たび傷ついたものも、やがてまた再擧の喜びを感ずることがありますし、今喜びに輝かしい日を送つてゐるものが、明日は暗い陰に曇らされることもあります。悲しみの中にも喜びがあり、喜びの中にも悲しみが潜

んでゐるのが、人生のすがたではありませんか。

實際ひろく世の中を見渡しますと、人それ〴〵の生活內容があつて、社會上の地位とか階級とかいふものも、千種萬樣ですから、一概に誰が幸福であり、誰が不幸であるといふことは出來ません。また漠然と不幸だとか悲慘だとか言ひましても、その性質や事情によつてさま〴〵に異なつてゐますから、自分のそれと他人のそれとを嚴密に比べて見ることは不可能であります。物質上では常に不幸な窮地に置かれてゐても、健康上では羨ましいほど幸福なものもありますし、家族の間には絶えず不幸が續いて、悲歎の涙にくれてゐても、物質上から來る不幸を少しも知らないものもあります。あり餘る富をもつてゐながら、その富をどうすることも出來ないほど、病弱な身體であることの不幸や悲しんでゐるものもあります。物質に禍されて精神のなやみに苦しんでゐるもの、前途に光明を認めながらも、僅かな資金が得られないために、あたら行く手を塞がれてゐるもの。——靜かに觀察する

と、文字通りに世はさま〳〵であります。

波瀾に富んだ冒險的生活をしてゐるものは、平靜な日を送つてゐるものに比べて、さぞ痛快なことだらうと思はれますが、それだけにまた心配や苦痛も多いことでせう。變化の多い生活が好いか、患ひのない靜かな月日を送るのが好いか、それは客觀的に見ての話で、その當人の主觀では、どちらにもそれ相應の意義があると言はねばなりますまい。

客觀的には無意義であり不幸であると思はれることでも、その當人は案外無反省で、さほどに感じては居ないのかも知れません。またその反對に、自分ばかりが如何にも高尙な生活をしてゐると思つたり、不幸の限りを經驗してゐると思つたりしても、廣い世の中にはそれ以上の人がないとは言はれません。從つて、不幸も窮迫も苦痛も、自分ばかりを襲つて來るものと思ふのは、その心が偏狹なかであります。そんな偏狹な考へをもつて自ら悲しんだり他を羨んだりするのは、獨りよがり

の慢心者と同樣に、省察力の極めて乏しいものと言はねばなりません。實に人生のすがたは、橫に量るべからざる種々の樣式があるとゝもに、縱にも無限の段階があるのですから、私たちが獨りよがりに考へてゐる生き方も、更に一段高い所から廣く見わたされたら、どんな形となつて現はれてゐるのか、ひたすら耻かしさを感ぜずには居られないのであります。

それ故に、どんな不幸に陷つても、私たちはそれを呪つてはなりません。また他を羨んではなりません。むしろ自分の理想に到達する途上の出來事として、すなはにその試煉を受けるやうにしたいと思ひます。その試煉が多ければ多いだけ、そしてそれに打ち克てば打ち克つほど、その人の生活の內容は豐富になつてゆくのであります。

自ら憐む

『Yといふ人は、どうも蟲が好かない。Kも厭な人だ。Bも口先ばかり巧いことを言つて、幇間的態度を取るから厭だ。』

私は書齋の机に頬杖をついて、ひとりでこんなことを思ひ浮べることが度々あります。人の弱點をゆるすことが出來ないのは、偏狹なからである。自分のことを棚にあげておいて、むやみに人を厭がるのは、わがまゝなからである。そんな我儘な性格であつてはならない、出來るだけ寛容の心をもたなければならない。――斯う思つてゐても、私には氣に入らない人が澤山あつて困ります。

自分と直接に關係のない人同志が、何かの世間話をして居るのを見ても、あの男はあんなことを言つて權勢に阿諛して居る。ぬけ目のない男であるだけに、氣のゆるせない厭な奴だと思ふことがあります。ふと自分で自分を顧みて、私は何といふ

下劣な心だらう、まるで刑事巡査のやうな態度になつてゐるではないか、あの男がどんなに權勢に阿諛しようと、それは私に何の關係もないことではないか、私にあの男を裁く權利はない、と氣のついた時、たまらなく耻かしさを覺えて、自分で自分を憐れみます。

自分でさへ自分に對して、それほど不快と耻辱とを感ずることがあるのですから、人は私のことをどんなにか陋劣に思つてゐるでせう。私にも權勢に阿附する心がないとは言へない、物質慾に動かされて、みにくい行爲をすることも隨分あり得る、或る場合には策略を弄することすらも知つて居るではないか。ほんとに私の性格には、厭な點が澤山あります。日常の動作にもわるい癖が度々現はれて來ます。從つて世間の人々は、私のことを厭な奴だと思つてゐるに違ひありません。

『厭な奴だ』といふ言葉の中には、傲慢な男といふ憎しみの意味も含まれてゐるでせう、無愛想でいけないといふ不快な感もあるでせう、虛勢を張つて高くとまつて

ゐるといふ侮蔑の意味もあるでせう。さう思ふと私は、耻かしさに穴あらば入りたい氣がします。

私は人に憎まれるのを、それほど苦痛とは思ひません。わからずやとして遠ざけられるのも、仕方がないとして忍びます。けれども陰で憐れまれたり、耻辱を加へられたりするのは堪りません。もし私が、私の知らない所で耻ぢしめられ、憐れまれてゐるのだつたら。……私はその事を想像するだけでも、一種の耻づかしさを覺えます。

『あいつは身の程を知らない、可哀さうな男だ、表面ばかり高く構へてゐても、内容の貧弱なことは、お話にならない。』

どこかで誰かゞ、私のことを斯う言つてゐるやうな氣のする時があります。そんな時私は、

『何とでも勝手に言ふが好い、今に見よ！』

斯う思つて奮起せずには居られません。

×

人は人、自分は自分である、何と言はれても構はない。——斯う達觀することが出來さへすれば好いのです。けれどもそれは、内に何等かの恃む所がなければ、到り得ない心境であります。その信念を得ようがために、私はどんなにもがき苦しんで居るか知れないのです。

日常の交際上でも、或る人々に對してはその顏色を讀むやうにして、腹の中をさぐり合ひながら口を利く煩はしさと陋劣さとに、自分でなさけなく愛想がつきることがあります。これは併し、顧みると自分が惡いのです。自分に誠意が足りないのです。或る場合には、自分の醜惡なところを包み隱さうとするからです。自ら正しいと信ずることを發表したり、自ら誠意をもつて人に對したりするのに、相手の顏色を氣にかける餘地はないではありませんか。

ですから、如何なる場合にも、とにかく私は誠實でなければならない、内に恃むに足るだけのものを掴んでゐないにしても、せめては消極的に、自ら顧みて疚しい所がないやうにしたいと思ひます。憎まれても誤解されても、たゞ誠實な心をもつてさへ居れば、世に立つて怖れる所はない筈であります。阿諛や策略によつて求め得たものは、やがて失はれて行きますけれど、誠の心のみは永久にその光を保つではありませんか。

悔なき一日

『愛の中に懼あることなし。全き愛は懼を除く。そは、おそれは苦しみを持てり。おほよそ懼るゝものは、愛を完うせざるなり。』（ヨハネ傳第一書、第四の十八）

自分の行はうとすることに不安を感じたり、人の氣心を兼ねておどくしたりするのは、愛が足りないからです、誠意誠心をもつてゐないからです。

こんなことを言つて、世間で何と評するか、あの人に對して私がしたことを、あの人は何と思つてゐるだらうかなどゝ、自分の言行に懼れを抱いて自ら苦しむのは、そのことが誠の心から出てゐない證據であります。まことの心をもつてしたことであるならば、たとひそれが世間で惡く解釋されても、自律的に何等の疚しさはありません。全き愛をもつてしたことは、たとひそれが誰にも受け容れられなくても、そのために自ら苦しむことはありません。

私はどんな境遇にあつても、些の悔なく苦しみなき心で居る日を送りたいと願ひます。

友情と恩惠

利害關係から全然はなれて、ほんとうに心と心との親しみで結ばれた友人を、一人でも持つてゐるものは幸福です。その友人には、何の蟠りもなく、衷情を吐露することが出來るからであります。

學生時代の友だちには、大抵利害關係がありません。たゞ學業の上で暗に競爭心を抱くことはありますけれど、友人を利用しようとか、物質的恩惠を受けようとかいふことは、比較的に少ないやうです。併し、學校を卒業して世の中に出ると、生活上の必要や虚飾から、利害によつて新らしく友人が出來たり離れたりすることが、だん〴〵多くなります。また利害を共にしないまでも、世間的のくだらない競爭心から、友人に對しても極めて表面的な交際しかしないやうになるものもあります。

技巧なき交際

殊に、多少でも恩惠を施されたものに對しては、いつまでも頭があがりませんから、對等であるべき友人に、さういふ情實がからんで來ますと、どうしても本心そのまゝを打ち突けてゆくことができなくなります。ですから、世間的にも精神的にも對等の地位に立つて、互ひに慰めたり、勵ましたりすることを喜びとする友人からは、なるべく恩惠を受けない方がよろしい、從つて、自分からもまた友人に對しては、恩惠的態度に出ることを避けなければなりません。

勿論、友人同志の親切な厚意は、いはゆる美しい友情であつて、これを恩惠と見るのが間違つてゐるのですけれど。

お世辭をいはなければならない交際は、私は非常に苦痛を感じます。お世辭の巧みな人とお話をしてゐる時にも、何だか不氣味な感じがして、早くその目の前からのがれたいと思ひます。

表面ばかりのお世辭や、何等かためにする所のある巧言にまるめ込まれるやうな人とも、交はりを共にしたくありません。淺薄な阿諛を輕々しく信じて、朴訥な誠實を見ようとしないやうな人ならば、友として深く信ずるに足りないからであります。

併し人は、やゝもすれば無愛想な眞實よりも、美裝したお世辭に引き入れられやうとする傾きがあります。殊に心の惱みや淋しさに附け込んで來る巧言令色は、身にしみて嬉しく感ぜられることがあります。その時、うつかり心を許すと、後になつて取り返しのつかない苦痛を味はゝなければならないことがあります。

眞實を裝うた巧言は、その場ではそれと解らなくても、ながい間には、必ずその

箔が剝げて來ます。何時いかなる場合にも、温かみと和らかみとのあるのは、眞實の心の現はれであらねばなりません。

×

或る家庭に客となつて行つた時、主婦の心づくし一ッで、その家庭が非常に居心地の好い所ともなり、惡い所ともなります。下にも置かないやうに歡待はされてゐるが、何となく居心地がよくないといふことも、私たちの經驗する所であります。

もてなし振りがあまりに巧妙で、何から何まで到れり盡せりといふやうな所では、勿論不滿のあらう筈はありません。それであつて、何となく氣の置ける窮屈さを感ずることもあります。これに反して、待遇に特別の技巧は加へられないけれど、いかにものんびりと打ち寛がせられる、いはゆる At home の感に氣をゆるさせる家庭もあります。この相違は、いふまでもなく主婦に誠意があるかないかによつて別れるのであります。また平素の主婦の心もちが、家庭内に於ける一種の氣分とな

つて漂つてゐるのであります。

豫期以上に鄭重な待遇を受ける時、何となくそのまゝでは濟まされないやうな氣がします。それに對して、こちらでも相應の態度を取らなければなりませんから、一種緊張した氣分になります。從つて、その塲限りならば我慢も出來ますが、ながい交際には疲勞も覺えますし、隙間も出てきます。けれども、一切のお世辭や技巧を拔きにして、ただ誠意をありのまゝに表白して交はつてゐるものゝ間には、何等特別の心づかひが要りませんから、常に自由な悦ばしさを感ずるのであります。

訪問客の話

私は自分勝手なので、氣の合はない客のお相手をしたり、忙しい時に人に訪ねて

來られたりするのを、頗る迷惑に感じます。殊に客と對座して、お互ひにさう興味のある話材もないのに、あくびを嚙みしめるやうにして我慢してゐなければならないのは、思つて見ただけでも苦痛です。

けれども、たま〳〵遠來の客を迎へて、心から隔てなく語り合ふのは愉快です。そんな時『有朋自遠方來、不亦樂乎』といふ言葉の意味が、ほんとうに味はゝれるやうに思ひます。一年も二年も音信をしないでゐても、たま〳〵の機會に、ほんとうの厚意から訪ねてくれる人には、深い懷かしみがあります。これに反して、用事のある時のみさも親しさうに裝うて來る人には、警戒しなければなりません。利用しようとして親しさを見せるものは、その必要のなくなつた時には、路傍の人よりもなほ冷淡になりますから。

毎年、夏休みになると、遠く離れてゐた人々が久々の上京を機會として、わざわざ訪ねて下さいます。また暑中見舞の手紙とゝもに、最近の境遇をこま〳〵と認め

て送つてくれる人もあります。私はそれ等の訪問客や手紙によつて、どれだけ激勵されるか解りません。そしてまた平素は何の氣もつかずに過してゐることを、斯ういふ機會に自ら顧みさせられる例も少なくありません。

『私の家のお姑は非常に好い婦人なんですけれど、讀んだり書いたりすることにちつとも理解がないので困りますの。少し閑があつて、私が本でも讀んで居ますと、本なんか讀む閑があつたら、針仕事をおしなさい、と仰つしやるんですもの。そして御自分のことを「私なんか十六の年にお嫁に來てから三十何年になるけれど、新聞をよんだことすら滅多にない」つて仰つしやるんですよ。ですから私、何か讀みたい時には、かくれて讀まなければなりませんの。』

S子さんは或る年の訪問の時、こんな話をしました。書物を讀まないことを誇りにしてゐる老婦人、而も世間からは知識階級と見做されてゐる家庭に、こんな舊思想の婦人があるかと思ふと、私は情なさを通り過ぎて、何だか滑稽な感を抱かずに

は居られませんでした。

S子さんはなほ語りつづけました。

『さういふ舊思想のお姑さんですから、私などゝはもうすつかり價値の標準が違つて居りますの。何でも、たんねんに廢物を利用することだの、どんな場合にも忍從しなければならないことだの、隨分いろ〳〵のことを敎へられましたわ。』

私はそんな話をきいて、田舍によくある古い家庭の沈滯した空氣や、そこに有爲の才能を腐らせてゆく青年男女のあることを想うて、自分の心までが暗くなるのを覺えました。

また最近に結婚したK子さんは、こんな話をしました。

『ほんとに私、結婚するまではそんなことちつとも考へてゐなかつたんですけれど、結婚して見ますと、やつぱり女には女の本務があるといふことが、ようく解りました。この頃はもう私、すつかり良い主婦になつてゐるんですよ。家事の執り方

についても、いろんなことを經驗するんですよ。何でも實地に當つて見なければ、女學校の教科書なんてほんとに駄目ですのねえ。』

全くさうです。現今の女學校では上すべりのした一般的のことを、さも個々の場合に當てはまるかのやうな教へ方をしてゐますから、殆んど實際の役には立ちません。料理法にせよ、家事經濟にせよ、生徒がこれから嫁いでゆくべき家庭の事情は、到底豫めわかる筈はないのですから、いくら實例を擧げて教へたにしても、それは畢竟教室で假設された一例に過ぎません。そんな假設のものをいくらよく知つてゐても、實際の場合にそれを應用する頭腦の働きがなければ、殆んどその用をなさない譯です。ですから、なまじひに個々の假設例などを教へるよりも、もつと深い處に突き進んで、臨機應變の處置を取り得るやうに、その頭腦をこしらへておくことが肝要なのです。本が出來てをれば、末の動かし方は、時と場合とによつてどうにでも向けられる筈です。今日の女學校教育が、この根本に觸れようとしないでゐ

るのを、私は甚だ嫌りなく思ひます。

このことについては、私は『現代少女とその教育』といふ書物の中に、隨分論述しておきました。S子さんにも、閑があつたらその書物を一讀して下さい、と言ひました。

その次に訪ねて來たA子さんは、『まア御覽下さい』と言つて、その健康さうな兩腕を出して見せました。

『ね、隨分荒くれてるでせう。でも、そりやアよく働くんですもの、好い氣もちですよ。働いてさへ居れば、くよ〳〵心配したり悲觀したりする閑はありませんわ。私この頃、つく〴〵さう思ひましたの、虛榮を張つたり、くよ〳〵悲觀したりするのは、なまけ者の病氣ですわ。そんな閑があつたら、どし〳〵身體を動かして働く方が好いんですわ。勞働の幸福——ほんとに働くことは幸福ですよ。』

A子さんの話ぶりは、きびく〴〵として氣もちが好い。聞いてゐる中にも、何だか

ぢつとしては居られないやうでした。働きさへすれば身體が健かになる、健かな身體であれば氣分も清々して、些細なことにも愉快を感ずる、從つて幸福にくらすことが出來る、といふのです。なるほどその通りです。私などのやうに、時々弱い身體をもてあますものは、勞働を苦にしない健康な人が、羨ましくてなりません。

石川縣下の一小都會に行つてゐる日子さんは、

『……私はもうどうしても田舍には居堪りません。是が非でも東京へ行かうと望んでをります。精神的には何の刺戟もないのに、世間的にはうるさいことばかりが、私の周圍に監視の眼を向けて居るのですもの、心の糧を取ることを一切禁じられて、體の好い牢屋に入れられてゐるやうなものです。おとなしくさへして居れば、喰ふことには困りませんけれど、それこそ豚のやうに生きてゐるだけのことです。狹い籠の中で、餌だけは與へられるけれども、一切の自由と活動とが束縛されて居る。——これが私たち田舍にゐるものゝ狀態でございます。どうぞお察し下さい、私はほんとにもう堪へられなくなりました。』

と書いて、過激とも思はれる思想を漏らして來ました。實際、現今の狀態で婦人が自己を正しく自由に育てゝ行かうとするには、どうしても田舍よりも都會の方が好いといふことを、私も思ひます。田舍の生活はあまりに囚襲的であり、階級的であります。なんにも知らずにそこに安住して居るものは、それで平和に濟まして行かれるかも知れませんが、一たび自己とその周圍とに眼をさましたものは、そのまゝぢつとしては居られなからうと察します。

併し、この手紙とさきに記したS子さんのお姑とを思ひ比べますと、私は『あゝあ』と歎息せずには居られませんでした。

彼我の對照

汽車の中で感じたことです。――二十二三歳とも見える西洋婦人が二人、おのおの大きな赤革のトランクを提げて乘り込んで來ました。その汽車には多くの乘客の中に、日本の若い婦人も三四人交つてゐました。それ等の若い婦人たちは、一樣に今乘つてきた西洋婦人に眼を注ぎました。

西洋婦人はそんなことには一向無頓着らしく、選當な空席を見つけて、その前に二ツのトランクを並べました。(トランクは大きいため、上の網棚には載せられなかつたのです。)やがて彼女等はそこに腰をかけると、少しの間、携帶品の置き場所に氣を配つたり、身のまはりを取りつくろつたりしてゐましたが、その中にそれ等のことが濟むと、一人は手提袋からノートブックを出して、しきりにそのページを繰つたり、鉛筆で何か書き入れたりしはじめました。他の一人は、雜誌を出してそれ

に讀み入りました。

私は少し席が離れてゐたゝめ、彼女等が何を讀んでゐるのか、何を書いてゐるのか解りませんでしたけれど、同じ車中にある日本の婦人と比べて見て、いろ〳〵の點に於て日本婦人が彼女等に劣つてゐることを、耻かしく思はないではゐられませんでした。

第一、體格に於て彼女等は日本婦人よりも遙かに優越してをります。日本婦人は、その携帶にかゝる貧弱なアケビ細工の籠の持ち運びにも、品川驛では赤帽の手を煩はしてゐたのを私は見ました。その籠が、事實重くて婦人の手に持ちきれなかつたのか、それともお上品ぶる體裁のために赤帽に持たせたのか、それは明らかに解りませんけれど、外から見ただけでは、西洋の若い婦人たちが自ら持ち運んでゐるトランクよりも、たしかに輕からうと思はれました。西洋の婦人が、あの重さうなトランクを、やす〳〵と自ら提げて自ら處置するのを見ますと、華奢な日本婦人

よりも、體力に於て遙かに頼もしい氣が致しました。

それから、西洋婦人の着てゐるものは純白な麻布で、見るからに質素で涼しさうです。(それは八月の暑い盛りでしたから。)然るに、日本の婦人の着てゐる柔らかな着物は、色彩の美しいことに多くの注意が拂はれてあるためか、何だか暑苦しくて贅澤なやうに見えました。この點に於ても、旅行の時などは西洋婦人の服裝の方が日本婦人のそれよりも輕快でよいと思ひました。

その汽車の中で私が見た日本婦人は、あいにく知識階級の人々らしくは見えませんでした。併し、服裝や持物から推すと、相當に富裕な家庭の人々であることは、誰の眼にも察せられるのでした。その若い婦人たちが、汽車中で何をしてゐるかと言へば、無駄話をしてあたりに遠慮もなく大きな聲で笑ふことゝ、ふところから化粧紙を出して汗ばんだ顔を拭くことゝより他、殆んどなんにもありませんでした。これを讀書に餘念のない西洋婦人と比べて、どちらが望ましいことであるか、言ふ

までもなく解つてゐるでせう。

私は斯ういふ對照を見せつけられる毎に、「あゝあ」と嘆息せずには居られません。そして自分の愛する姉妹が、公衆の前で侮蔑されてゐるのを、默つて見てゐなければならない時のやうな悲しさを感じます。

時勢の推移

電車や汽車の中では、よく無作法な婦人を見かけることがあります。他人の迷惑をも構はず、ひろい座席を獨りで占めてゐるもの。一ぱいに席がつまつてゐるのに、無理に人と人との間へ割り込まうとするもの。足を横の方に投げ出して、だらしのない姿勢をしてゐるもの。一しよに連れてゐる子供が、傍若無人な振舞ひをす

るのを平氣で許しておく母親。すべて斯ういふ無作法な婦人は、あたりの人々に眉をひそめさせます。

男子の中にも、勿論無作法なものがない譯ではありません。否、概して男子の方が婦人よりも、より以上に無作法でせう。けれども、婦人の無作法なのは特に目につきますし、また中には、婦人であるが故に或る程度までは許されるだらうといふ豫想をもつて、無遠慮に振舞つてゐるものもあります。從つて、男子に對する非難は非難としておいて、それ以上に婦人は細心な注意を拂つて、自分のことを顧みなければならないと思ひます。

尤も、婦人の中には汽車や電車に乘り慣れないために、知らず識らず無作法なことをして居るものも少なくありません。お座敷に座つてゐる時には、一通りの禮儀作法を心得て、極めてしとやかに振舞つてゐるものが、一たび家を出て多數の群に入りますと、殆んど自分の地位やたしなみを忘れたやうに、無遠慮な行動を取つて

耻ぢないこともあります。殊に、『旅の恥は掻きすて』といふやうな思想に養はれて、旅行中の汽車や宿屋で身のほどを忘れた無耻な行動をするものも、ないとは言はれません。

斯ういふ淺はかな考へから、無作法な振舞をするものは、もとよりその人の性格にもよることですが、併しまた一面から觀察しますと、これまでの婦人が公共的道德を養ふやうに訓練されてゐないからであるとも思はれます。これまでの婦人は、ただ家庭ばかりを王城として、一から十まで、家庭内の生活に適するやうに敎へられたゝめ、その他を顧みる暇がなかつたのです。そしてまた、電車も電話もなく、婦人が社會的會合に出席するやうな例もなかつた時代には、それで差支なく濟んでゐたのであります。

けれども、現今の時勢ではいくら消極的な婦人でも、社會公共の機關と全然接觸しないで日を送ることは、到底出來なくなりました。即ち、娘時代には夢にも知

らなかつた電車や乘合自動車に、お婆さんになつてから、吊革にぶらさがりながら乘らなければならないといふ有樣なのであります。そこで、不慣れなために、譯もわからずに無作法なことをする場合も多いのだらうと思はれます。

殊に、婦人會の席上などで、相當に身分あるらしい婦人が、場所慣れないために、見るも氣の毒なやうな滑稽を演ずる例が少なくありません。在來の日本の座體には慣れてゐても、西洋風の立禮や會合の方法に無知なために、婦人がどれだけ氣苦勞をしてゐるか、(氣苦勞をするだけの反省なき婦人は、どれだけ無遠慮なことをしてゐるか。)それは實にお話にもならないやうな例が澤山あります。

さすがに學校教育を受けた若い婦人には、そんなことは殆んどありません。學校に於て公共的生活の準備教育も施されてをりますし、また文明の利器に對する知識も相當に與へられて居ります。それ故に、公衆の前で物笑ひになるやうなこともしませんし、また會合の席上でも、それ相應の態度を保つことが出來ます。

こゝで年取つた婦人が考へなければならないのは、時勢の推移とゝもに自分の思想や慣習を社會に適應せしめて行かなければならないと同時に、その娘の思想と教育とに十分理解を持つやうにしなければならないことであります。自分たちの娘時代には斯うであつたから、今の若いものもその通りでなければならないと言ふのは、時勢を知らないものゝ偏見であります。

然るに、世の母親たちがこの間違つた回顧的偏見に囚はれてゐるために、若い人々の心情が、どれほど害はれつゝあるか解りません。娘に理解のない母親は、やがてその娘から侮蔑されます。そのため相互の間に隔意が出來て、親子の愛情はありながら、日常の生活に憎み合つた態度を取らなければならないやうなことになるのであります。

頑固な婦人は、現代の若いものゝ言ふことに耳を傾けないで、ただ『私たちはそれで濟んで來たのだから』と言ひます。なるほど當人は、それで濟んで來たと思つ

てゐるかも知れませんが、實はそれでは濟んでゐないのです。さきに記しまじた通り、電車の中や公衆の會合で無作法なことを恥ぢないのは、斯ういふ婦人に多いのですから、當人はそれで濟ませるつもりでゐても、他から見ると、そのまゝに濟まされないことが少なくないのであります。

併し、相當に年をとつたものが、これから時勢に適應するやうに、その思想も慣習も、すべての改造を試みるのは、非常な難事であります。やむを得ずんば、せめてはこれから世の中に出てゆく子供たちの教育について、良き母として、それだけの理解を持つやうに心がける必要があると思ひます。

男子の婦人觀

婦人問題や女子教育に關する意見を發表する男子は、大抵はその母親か細君か姉妹かを標準にして論を立てゝ居る、と言つた人があります。なるほどさう聞いて見ると、蓋しその通りだと思はれる點が多々あります。

よい母の下によい姉妹とゝもに育てられた男子は、たいてい婦人に對して敬意をもつて居ります。教養ある婦人を妻としてゐるものは、必ず女子教育の必要を主張します。これに反して婦人を侮蔑するものは、殆んど皆その母がよくない婦人であつたか、妻の品性の下劣なのに因るやうであります。イブセンが婦人問題に同情をもち、ストリンドベルヒが婦人を惡しざまに罵つてゐるのを見ましても、この間の消息は察し得られるのであります。その他、ミルを御覽なさい、ハイネの生ひ立ちを讀んで御覽なさい、現代の婦人問題を取扱ひつゝある人々の家庭をのぞいて御覽なさい、この推察の間違ひでない例證が、いくらでもあります。

或る女學校の校長が、『生徒の父兄で女子教育に熱心なのは、大抵その細君がしつ

かりして居るやうです。好い母親をもつてゐる生徒は、どこか違つた所があります
よ』と言つたことがあります。これも婦人のかくれた力が、その周圍のものを動か
す確證として、ひろく一般的に認めて誤ちのないことだと思ひます。

家庭にある婦人の力は、直接に社會には現はれませんが、その良人を通じて、その兄弟を介して、その子供を動かして、あらゆる方面に影響を及ぼしてゆきます。これは今更いふまでもないことではありますが、思ひを潜めて社會組織の改造や、次代の國民の教養を考へる時に、どうしても良い婦人をつくることを第一にしなければならないといふことが、痛切に感ぜられます。

青年男女の交際

或る年の「たかね婦人會」懇談會の席上で、友人清野暢一郎君が、『日本の若い婦人は集會の席上で、大きく口を開ける術を知らない。詳しくいふと、衆とともに樂しく笑ふことも知らなければ、快活に話し合ふ話題も持つてゐない。』――斯ういふ意味のことを述べました。そしてこれは、會合に慣れないからではあるが、これまで青年男女交際の道が開かれなかつたからである、と說きました。その意見には私も同感を表します。

男女共同の集會で、大きな口を開け得ないのは婦人ばかりではありません。男子の中にも淑女に對する禮儀を知らないものがあつて、隣合せの席についても、默りこくつて相手にきまりの惡い思ひをさせたり、無作法なことをして不快の感を起させたりするものが、隨分あります。從つて、この點で婦人ばかりを責めるのは酷で、(清野君は婦人ばかりを責めたのではありません、むしろ男子の態度が惡いと言つて非難したのです。)男子も婦人に對して、上品に快活に口を開き得るやうにな

らなければなりません。家庭を離れて遊學してゐる青年男子は、下宿屋の女中や、カフェーのメードにからかひ氣味の無駄口をきく機會はあつても、教養ある淑女の前に出て、穏やかに世間話をしたり、或る問題について自分の意見を吐露したりすることは、殆んどないと言つてもよい位なのですから、たま〳〵男女共同の集會に出て場おくれがするのも、無理のないことでせう。

青年男女が適當な方法によつて交際することの必要なのは、あらためて言ふまでもありますまい。今さら男女交際の必要などを事新らしく述べ立てたら、時勢おくれの愚痴として嗤はれるかも知れません。けれども、それほどよく解つてゐることでありながら、今なほ實際に於ては、適當な方法も機會もつくられて居ないではありませんか。

結婚が男女の正しい愛と理解とによつて成り立たなければならないといふことは、現今の識者が何の異議もなく認める所であります。それならば結婚前に、どう

して青年男女がお互ひに心情を理解し合ふか。これはどうしても相當の時日をもつた交際によらなければなりますまい。不純な結婚が行はれたり、結婚後夫婦の間に意志の阻隔する所があつたりするのは、日本の社會に男女交際の道が十分に開かれてゐないことを、その原因の一ッに數へなければなるまいと思ひます。

結婚のためばかりではなく、既婚の男女も廣く交際して意見を交換するやうになれば、知的にも道德的にも、お互ひに啓發されるところの多いのは、くだ〳〵しく言ふまでもありません。殊に生活上の改善や社會の風習を改めるには、男女の理解ある共同盡力によらなければ、實蹟を擧げることが困難なのですから、この點だけを考へても、未婚と既婚とを問はず、男女はもつと自由に交際することを望まなければなりません。

然るに日本の現狀では、教養ある男女が公然と一堂に會して、相互に隔てなく話しあふといふやうな機會は、殆んど見出されないではありませんか。たま〳〵音樂

會や帝劇の廊下で會ふことはあつても、それはホンのかいま見るに過ぎなくて、お互ひに思想上の話をするやうな閑もなければ、心にその餘裕もありません。また親戚の間で、わかい男女が晩餐を共にするとか、何かの機會に訪問するとかいふことはあつても、その範圍も話題も、殆んど限られてゐるのですから、一般公開の席上で會ふやうな心もちにはなれないのであります。またさういふ機會でなければ、全然自由放恣な、監督者もなく禮讓もない密會的交際が行はれて、意外な弊害を醸すことになるのであります。その弊害を防ぎ除くためにも、思慮ある人々がもつと上品な男女交際の途を開くやうに、その機會を捉へることに注意を向けなければならないと思ひます。

さまざまの性格

聰明な性質で、知識があり餘るほどあるのに、意志がこれに伴なはない人は、とかく自己省察が鋭くて、新らしい試みなどに對しては、それがよいと承知はしてゐながら、何となく不安を感じて、どうにも手を着けることが出來ないやうです。いはゆるハムレット型とは、斯ういふ人のことでせう。

意志が強くて身體の健かな人は、概して物事を苦にしません。ぢつと考へてゐるよりも、先づ實際に手を着けて見るといふ風です。從つて、反省したり周圍を顧慮したりすることは、割合に少ないやうです。何でも自分で自分を信じてしまひます。世間の人々がみんな意久地なしで、自分一人すぐれてゐるやうに思ひたがります。即ち、やゝもすればお天狗になりやすい傾きがあります。

この二つの型は、どちらが善いか惡いか、もとより一概には言へません。それぞ

れ一得一失がありますから。けれども、思想上ではどちらに苦痛が多いか少ないかと言ふことになりますと、自己省察の鋭いものゝ方が、たしかに自ら惱むことが多いやうです。それは自分の言行に一々自分で批判を加へてゆくのですから、時によると、生きてゐることが苦痛になることもあるでせう、たえず自分で自分を憐れんだり、責めたりする結果、遂には愛想がつきてしまふこともあるでせう。

そんな場合、どうすれば自分の生存の價値が見出されるでせうか。やつぱり責めるだけは責め、苦しむだけは苦しんで、どこかに一條の活路が開かれるのを待つより他に、何とも仕方がなからうと思ひます。ある一點に思ひを潜め力を注いで、深く深く突き究めて行つたら、遂にはポッカリと明るい孔があく、と先輩は言つてをります。曙光の見えるまで、暗い所で苦しみを續けてゆくか、途中で自ら負けてしまふか、そこが肝要な點なのです。『井を堀りて今一尺で出る水を、掘らずに出ぬといふ人ぞ憂き』といふ道歌もあります。明るみに出られるか出られないか、とに

かく狙つた所を掘つてゆくより他に道はありますまい。苦しい人生ではありますが、性格から來る惱みですから、何とも仕方がありません。

これと反對に、自分を高く評價し得る人は幸福です。幸福でないにしても、深い惱みに自らを責めるやうなことは少ないでせう。不平があり不滿があるにしても、それは自分に對する不平不滿ではなくて、對象は常に他にあります。ですから、自分が周圍から敬意を表せられたり、ちやほやされてゐる限り、何の不平もなく上機嫌であります。けれども、自分が問題にされなくなると、とかく世の中のことが癪に觸つて、事毎に憤慨したり、反抗したりするやうになります。惡いのは自分ではなくて、他に罪があると思つてゐるからであります。斯ういふ性格の人は、つとめて自ら省みる習慣をつけることが肝要であります。

また、才氣縱横で、行くとして可ならざるなしといふやうな人があります。そんな人は、何をするにも躊躇せず、キビ〳〵と片づけて行きます。人と話をしても、

一をきいて十を知るといふ風ですから、面倒くさい説明などは加へられなくても、すぐその要領を得てしまひます。さうかと言つて、人の話を聽かないのではありません、むしろ感心に世間話を傾聽してゐるのです。そして、それをすぐ自家藥籠中のものとしてしまひます。かういふ性質の人は、讀書や思索によるよりも、世間的の変際や旅行によつて、その知見を擴めて行きます。

學究的態度を取るものは、これと正反對です。一寸旅行をするにも、相當の準備を要します。足もとから鳥が立つやうなことは出來ません。人と話をするにも、とかく理に落ちなければ承知しないといふ風です。從つて、概して華やかな社交を厭ひ、靜かにしんみりと語り合ふ友を求めます。

學術の研究に志をもつてゐるもの、世俗的の榮達を望むもの、それ〴〵に性格も違へば、行き方も異なつてゐるのですから、他を眞似ようとしないで、自分で自分を評價しつゝ進んでゆくやうにしなければなりません。

個々の事例

誰にでも當てはまるやうな一般的の意見は、讀んでも聞いてもさほどの感興が起りません。いはゆる常識をもつて判斷することの出來る意見ならば、殊更に教訓がましく聽かされるにも及ばないと思ひます。人をして耳を傾けしめるのは、どうしても新らしい卓拔な意見か、でなければ異常な事件でなければなりません。日常普通のことは、もう聽きあきるほど、見あきるほど知つて居るから、それをいくら生眞面目に説かれても、感奮興起させられることは極めて少ないのです。從つて、人を動かさうとするには、何か目新らしい事柄を捉へなければなりません。講演會の話材や婦人雜誌に掲げられる記事などに、或る特別の事例が多いのは、かういふ心

理に投ずるために他ならないのであります。

けれども、異常な事柄は誰でもこれを經驗するといふ譯には行きません。例へば、貧窮に處して幾人の子供を立派に育てあげた話とか、病苦と闘ひながら或る事業を大成した婦人の經歴談とか、咄嗟の間に危險から免れた機智とか、すべてさういふ實例は、人を感動せしめる大きな力を持つて居りますが、その境遇に居るものでなければ、再びこれを經驗することは出來ません。從つて、それを聽いたり讀んだりした當座には、誰しも發奮しますが、さて實際に行つて見ようといふ場合になりますと、自分の性質や境遇がしつくりとそれに合はないため、それほどにする必要はないやうに感ぜられて、何時とはなくその刺戟が微弱になつてしまひます。勿論、尋常普通の境遇にあるものが、殊更に逆境に身をおとす必要もなく、寒中に筍堀りの眞似をするにも及ばないのであります。

それよりも大切なのは、變に處して適當に行動し得る思慮を養つておくことであ

ります。窮境に陷つても意氣を阻喪せしめないやうに、強い意志を養つておくことであります。想ふに、個々の事例はその人々の考へによつて、これを適當に處置してゆくより他に仕方がありません。そして、いかに多くの實例を聽かされてゐても、自分にそれと同じやうなことが繰返されるとは限りません。自分の場合は、自分の思想によつてその解決をはからなければならないのであります。それ故に、個々の事例を多く知つてゐるよりも、(無論これを知らないよりは勝つてをりますが、)寧ろそれ等の異なつた場合に處し得る頭腦を養つておくことが大切なのであります。知る、知らないの問題ではなくて、頭腦が出來てゐるか否かゞ、第一の要點なのです。頭腦さへ出來て、相當の識見を持つて居れば、時に應じ場合に臨んで、適當な手段が案出されます。個々の場合に處する手段は末で、その本となるものは當人の頭腦のはたらきであらねばなりません。

現今の女子の教育は、その本を養はずして、徒らに末の方にばかり煩はしく拘泥

してゐるのではないでせうか。御飯の焚き方やお掃除の仕方は、相當に頭腦のあるものなら、一度その方法を敎へられゝば、あとは自分で考へられる筈です。その考へる力――それを根本的に敎へ養ふことが、最も大切であると思ひます。

婦人の讀みものにしても、これと同じことが言へます。或る事例を興味本位に書かれたものが一般に歡迎されて、それ等の事例の奥にある理論を說いたものは、顧みられないといふ有樣であります。抽象的な原理や原則を書いたものが、專門家以外に讀まれないのは止むを得ないとしても、少しく推理をめぐらしさへすれば常識で理解し得られる程度のものでも、事例を拔きにした堅い書き方では、これを讀むものが少ないといふやうでは、甚だ心細く感ぜざるを得ません。

個々の愛憎

H書店の店員だちの中に、私が日頃あまり快く思つてゐない男によく似た顏をしたのが一人あります。私は店先などで、その店員に恭しくお辭儀をされると、何だかわざとらしくされてゐるやうな氣がして、不快な感をもちます。

併し、その店員が私に對してどんな感じを持つてゐるのか、勿論わからないことであります。殊にまたその店員と、私がいやがつてゐる男とは、たゞ顏が似てゐるといふだけで、性格にも境遇にも何の關係はない譯であります。それにも拘はらず、私はその店員に對して好感をもち得ないのを、自ら顧みて恥かしく思ひます。

また同じH書店に、牛込から來てゐる店員があります。その店員の姉さんは或る女學校に通つてゐて、いつか何かの會で、私の講演をきいたこともあるのだとか、その店員が恥かしさうにして私に話したことがありました。たゞそれだけのこと

で、私はその店員の姉さんの顔も知らなければ、勿論口をきいたこともありません。それでも、そのことを聞いてから、何となくその店員に親しみを覺えるやうになりました。

この二人の店員について、私は直接には何の關係もないのですから、もとより恩怨のある譯はありません。然るに、一人を憎んで一人を愛するといふ、われながらふしぎな心理だと思ひます。ドストイエフスキーの『カラマゾフ兄弟』の中には、ある醫師をして次のやうに告白せしめてゐる所があります。

『私は人類を愛します。併し、自分で自分がふしぎでなりません。人類を全體に愛すれば愛するほど、特別に人を愛することが出來なくなります。夢の中に私は、しば〳〵熱心な仕事を人類の奉仕のためにしようとしました。現に萬一の必要あらば、十字架につけられてもいゝと思ひます。さて實際の場合となれば、私は誰とでも二日一所に同じ室にゐることは出來ません。……私は人々が私に近づいて來る

瞬間、人々と敵になるのです。然し私が、個人的に人間が憎くなればなるほど、私の人類に對する愛は一層熱烈になるのが常でした。』

またケーベル博士は、『私の愛し得るはたゞ此人彼人であつて、決して人類――これは一體全く存在して居ない――ではない。然し、たゞ個々人を愛することさへ出來れば、私はすべての生ける者に對して同情をもち得るのである。』と言つて居られます。私は私の理想として、どうしてもケーベル博士の敎へに從はなければならないといふ氣になります。そして、憎むべき理由もない一人の店員をも愛し得ない自分の心を、あはれまずには居られません。

子供の時、小學校へ通ふ餘暇に、私は田舍で相應に名高い或る漢學者の家へ行つて、論語の講義をきいたものでした。漢學者は嚴格な先生でした。私たちはその先生を畏敬してもゐましたし、またその學識の深いことも、子供ごゝろに信じてゐました。

その先生は、『論語には幾通りも講義の仕方がある。初學のものにはたゞ意味だけ解るやうに敎へてやる。やゝ進んだものには、註を聞かせる。更にそれ以上のものには、諸家の說を參考として聞かせる。君たちはまあやつと素讀が出來る位なのだから、字義を解らせるだけでも大變だ。』斯う言つて、毎日二節か三節づゝ敎へて下さいました。

私は今、その先生に敎へられた論語の講義は大部分忘れて居りますけれど、講義を幾通りにも分けるといふ先生の言葉だけは、何かにつけてよく思ひ出します。何の講義でも、これを聞くものゝ學力の程度によつて、ぴつたりとよく理解されるこ

ともありますし、また一向意味の通じないことがあります。從つて、假りに論語を讀んでつまらないといふものがあつても、それは論語がつまらないのではなくて、讀むものゝ心がそこに向つてゐないからである、と言はねばなりません。

小說を讀んでもその通りです。トルストイの作に人生の意義を感ずる人もあれば、ゾラやドウデエの作が面白いといふ人もあります。ドストエフスキーの作でなければ、文學でないかのやうにいふ人があるかと思へば、『白痴』や『惡靈』はくだ〳〵しくて、讀む氣になれないと貶す人もあります。また、思想の十分に定まらないものに、クロポートキンの說を讀ませるのは危險でせうが、相當に見識をそなへたものが研究的批評的に讀むのは、ちつとも危險ではありません。鋭利なナイフを子供の玩具に與へるのは、勿論危險です。けれども使ひ方を知つてゐるものが、なるべく鋭利なナイフを欲しがるのも、これまた當然のことであります。玩具の木刀と鋭利なナイフとの相違は、これを使ふものによつてはじめて明らかになると言は

ねばなりません。

普通の人が見て、何の感興を起さないやうなことでも、藝術家は直ちにその核心に觸れて、そこから深い人生の意義をひき出してくることがあります。同じ一ッの事件に對しても、人々の經驗と心狀とによつて、さまざまに異なつた解釋が試みられます。即ち客觀は同じであつても、主觀の態度如何によつて、その見解が違つて來るのです。共鳴とか同情とかいふことも、人々の心もちと境遇とによつて、深くもなりますし、淺く觸れたゞけに止まることもあります。

それ故に私たちは、何をきいても相當に理解し得るだけの素養をもち、また何事にも心から同感を表し得るだけの溫情をもつやうにならなければなりません。この點でも、やはり人格のひらめきが、最も尊いものとなつて現はれるのを知ることが出來ます。

衷心からの要求

讀むにも書くにも考へてにも、すべて自分の心から、さうしたいといふ强い要求に促されてするのでなければ、得る所が極めて少ない。他から强制されて、いやいやながらすることに、ろくな成績の擧つた例がない。――斯ういふ意味のことを、私はもうこれまで度々述べました。本書の「自ら求める心」の一章もそれであります。何事をするにも、自發的であり獨創的でなければならない、一時の模倣や追隨ではいけないといふのです。

婦人問題が盛んに論ぜられるやうになつたから、世間なみに婦人の權利を主張する。併しその當人は、必ずしも熱烈な要求をもつてゐるのではない、といふやうな例も、これまでの婦人界には見られないではありませんでした。勞働問題が新聞雜誌にやかましく論ぜられると、直ちにそれに雷同する。「時」を貴ぶ觀念を養はなけ

ればならないといふことが提唱されると、人の忙しいのもお察しなく無駄話に訪問時間を過ごしてゐながら、たゞ時計の時間だけを正確に合せて見る。友たちの間に何かの研究會が發企されると、自分はその題目について何を知らうといふ意志はなくても、物珍らしさと體裁をつくるためとで、その會員に加はる。斯うして、何にでも一寸注意を向けては見ますけれども、それ以上深く進んで行かうといふ精神を持つてゐないのです。それは、都會に育つた婦人の通有缺點ではないかとさへ思はれます。

文學や哲學の研究に取りかゝつて見る若い婦人は、隨分たくさんありますけれど、どうも熱心が足りなくて、多くは永續しないやうです。それは婦人の意志が弱いからだといふ人があります。また婦人は家庭生活の煩はしさに氣を取られて、一ツの事に專ら力を注ぐことが出來ないからだ、といふ人もあります。想ふにそれは、どちらも一ツの原因であるに相違ありません。併し、もつと根本的に考へます

と、婦人に熱烈な要求がないからである、突きつめた所まで進んで行かなくても、どうにかして妥協的生活を送ることが出來るからである、と解釋してよからうと思ひます。ほんとうに衷心から痛切に求める所があるものならば、周圍の事情に打ち克つて、行ける所まで猛進して行きます。

悲しいことには、わが國の婦人は從來あまりに抑壓的追隨的生活に慣らされ過ぎてゐました。自分から進んで何を求めようとしても、それは殆んど絶對に顧みられることなく、たゞ外部からのみ强制的に勝手なものを附與されるに過ぎないのでした。抑へつけられたものには、自分の心をすつかり無いものにして、たゞ屈從するより他に仕方がありません。もし自分から動かうとすれば、忽ち許しがたい反抗と見られてしまひます。斯うして婦人の自發性や獨創力が、ながい間に痳痺させられたのではないかと思ひます。

併し、すでにその人格が認められ、その生活が自由に解放された以上は、婦人も

在來の模倣と追隨とに甘んじてゐてはなりません。各自の個性を自由に發揮するためには、どうしても衷心から動いて行かなければならないのです。動いて行くには目標を必要とします。その目標となるものは、即ち各自の理想であります。理想は遠い將來にあるものゝやうに思はれますが、實は最も近い各自の心の中に宿つてゐるのです。從つて、理想を抱いてゐるものこそ、その實現を期するために、自發的に動き進んでゆくのであります。

リジアの信念

シェンキウィッチの『クォー・ヴヂス』（邦譯『何處へ行く』）をお讀みになつたお方は、リジア姫がクリスチャンにあらざるローマの貴族ヴヰニチウスに戀をされ、

それを避けるためにネロの宮廷から逃れて、或る傳道者の家に暫らく身をかくす所があるのを御存知でせう。

ヴヰニチウスは犬のやうな悖德漢チロの密偵によつてリジアのかくれ家を探知して、リジアを奪ひ取りに行きます。すると、リジアの忠僕で無双の腕力をもつてゐるウルススは、姫を抱へて逃げようとするヴヰニチウスを一擊の下に打ち据ゑ、身動きもならないほどの負傷を與へます。その時リジア姫は神を信ずるクリスチャンの寛容な心から、親切にヴヰニチウスを介抱してやります。ヴヰニチウスはリジア姫をはじめ、その周圍にゐる基督教徒の慈愛に充ちた心や行爲を、自分の異教的精神から推しはかつて、はじめはどうしても正しく理解することが出來ません。彼等から見れば敵であるべき自分が、なぜこんなに親切に取り扱はれるのか、ふしぎで不思議でたまらないのです。殊に、解釋に苦しむのはリジアの心であります。富も權力も、あらゆる現世的快樂を無視して、ひたすらに靈の安らかさに永遠の平和を

求めようとする彼女の心が、どうしてもヴキニチウスには理解し得られないのです。それでもヴキニチウスは、リジアの親切な介抱を受けながら、静かに對談を進めてゆくことによつて、今まで彼女を不正な手段（暴力）を用ひて自分のものにしようとしたことが悪かつたことを悟りました。そしてまた、基督信者の人道的精神をも、徐々に察することが出來るやうになりました。それでヴキニチウスはリジアに向つて、

「それはさうとして、あなたは今幸福ですか。」

と尋ねて見ます。するとリジアはすぐに答へて、

『はい、クリストに何もかも申しあげることが出來るのですから、不幸なことはございません。』

と言ひ切つて居ります。その信頼の心――悲しみも苦しみも、望みも喜びも、すべてを打ちあけてキリストに信頼するところに、人間の力を超越した強みがあります

す。何等の秘密なく、何等の疑念なく、一切を開放してクリストに告白し得るところに、普通の人間の想像も及ばざる慰安と平和とがあるのではありませんか。

この強い心、このうるはしい心が、遂にヴキニチウスを動かして、自由と愛との如何に貴いものであるかを自ら知らしめ、暴虐比類なきネロ皇帝のあらゆる迫害にも屈するところなく、最後の勝利を得しめたのではありませんか。

私たちが毎日あくせくとして、精神的苦悶と闘つてゐるのは、まだその心を體得することが出來ないからです。自ら顧みて恢しくない生活をするといふのも、要するにその信念に到達することに他ならないのだと、私は考へてをります。

若き婦人の思想生活 終

大正九年十二月十六日印刷
大正九年十二月十九日發行

【定價金貳圓參拾錢】

若き婦人の思想生活
奥付

不許複製

著者　沼田笠峰
發行者　河本亀之助　東京市麹町區平河町五丁目三十六番地
印刷者　河本俊三　東京市麹町區隼町二十番地
印刷所　洛陽堂印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地

不許複製
洛陽堂

電話九段九六六番
五一一番
振替東京二〇九一四番

洛陽堂　東京市麹町區隼町二十番地

トエ3M-23

婦人の修養書類

□高島平三郎著	家庭心理講話	定價 四、五〇
□高島平三郎著	婦人心理講話	定價 二、八〇
□沼田笠峰著	わかき婦人の行くべき道	定價 一、八〇
□沼田笠峰著	わかき婦人の結婚と自覺	定價 一、六〇
□嘉悅孝子著	怒るな働け	定價 一、八〇
□高峰博著	家庭に於ける婦人の覺醒	定價 二、三〇
□關寛之著	父母と教師のため玩具と教育	定價 二、三〇
□高島平三郎著	教育に應用したる兒童研究	定價 五、〇〇
□河合三郎著	不用意が招く愛兒の死	定價 一、七〇
□高島平三郎著	應用心理十四講	定價 四、五〇

終